
巡りモノ

荒地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

巡リモノ

【Nコード】

N8847G

【作者名】

荒地

【あらすじ】

とある少年は、偶然異能の力を手に入れ、偶然とある戦火に巻き込まれていく…と書いてもあんまりシリアスじゃありませんが。

※この作品には二次創作部分が含まれます、ご注意ください。

第一話：カイコウ（前書き）

ある意味ダメ方向まっしぐらな二次創作物です。

そういうのが嫌だと言う方は他作者様の作品を読むことをお勧めします。

それでも読んでくださると言う方は、拙い文章ですがお付き合い下さい。

第一話：カイコウ

夏休みが始まって、早三日。

その日、金の短髪に黒い瞳の彼、柊和兔ひいらぎとは、図書館にいた。

仲の良い友人と二人で、バカ広い大図書館を漁るのは、まあ楽しい。これで友人が女なら：せめて、もう少し愛想がよかったら：とか思っているのは誰にも言わないだろうが。

「さて：なんか懐かしいモンを見つけたわけだが：」
手にしたのは、古ぼけた童話の絵本。

「何年前かな：」

：思うに、五歳の時以来か？

”不思議の国のアリス”。

変な穴に入り込んで、変なウサギについて行って、変な猫やら変な女王やらに出会う物語、だと記憶している。

しかしまあ曖昧だ。

また読んでみるのも悪くないかもしれない。

「うわ：すごい埃：」

ページを開いた途端、大量の埃が舞い上がる。

「ああ目に入っ：いたたたたた！？」

突如首筋に走る謎の痛み。

これは、そう、注射針の痛み。
と。

唐突に眠気がしてきた。

ああ、これが：

Down, down, down. 《落ちる、落ちる、落ちる》
Would the fall never come to a
n end? 《どこまで落ちたら終わるのだろう?》

◆ ◆ ◆
「いってー…」

頭とか背中とか、とにかく体の後ろ側が痛い。

「なんなんだいった…」

立証できないものを省いて、残ったものが真実であるとは言うが。

「急がなくなっちゃ、急がなくなっちゃ」

人間大のウサギが二足走行して人語を喋っているのはなんなんだ？

「って待ちやがれ!？」

とりあえず追いかける。

しかし。

(…速い!?)

流石はウサギ、脚力が尋常ではない。

「急がなくなっちゃ、急がなくなっちゃ」

いちいち懷中時計を確認しているのに、少しも速度が緩まない。

「よいしょと」

突然、ウサギが跳ねた。

(…???)

上を見上げていたので反応が遅れた。

下はそれなりに崖だ。

「ノオオオオオオオオオオオオ!？」

ドジャッ

「…オ？」

何かが下敷きになったようで、痛みはなかった。

「…どいてくれるとすごくありがたいね、少年」

「ああ、悪い」

下敷きにしていたのは、なんとも紳士ルックな奴。

「ああ…卸したての燕尾が…」

「えっと…すまん」

とにかく謝ってしまう。だからヘタレだなんだと呼ばれるのだ。

「いや、気に病むな少年。うっかり崖の下を歩いていた私が悪いのだ」

いって、燕尾服と背の高いシルクハットについた埃を落としていく若い紳士。

よく見ると以外に長身痩躯だ。

「ところで少年、君はどこに行くのかね？」

「そういえば！…あの白ウサギどこ行った！？」

完全に見失ってしまった。

ホワイトラビット

「おお、君は”白兎”の知り合いかね？なら私とおいで。これからアイツとの”茶会”に行くんだ」

「ホワ…？茶会…？」

なにを言っている？

「まあおいで、楽しいとこだから」

言って、誰もが振り返るであろうムカつくくらい美形な顔を緩ませた。



辿りついたのは、野原の上に丸テーブルと椅子を置いただけの光景。

「遅くなってすまない、諸君」

「何々、待ってないヨ帽子屋サン♪」

ウキウキと片言で返すのは、ダブダブの黒いセーターとダブダブの黒いジーンズを身に着けて、黒いウサギの耳をつけた、短く切った病的な白いボサボサ髪と、病的な白い皮膚と、病的に痩せた身体と、異常に紅い眼をした美青年（なんか儂い感じが漂っている）。

「もう少しゆっくりでよかったかな？」

言うのは、さっきの白ウサギ。よくみると茶色のベストを着て、丸縁眼鏡を掛けている。

「スー…スー…ZZZZZZZZZZ」

テーブルに突っ伏して寝ている奴もいた。

「何はともあれお三方、今日も愉シイ”お茶会”の時間デスヨ♪」
男の発音は訛りというか、カタコトというか、なにせひどく聞き取り辛かった。

「これって…」

だんだん思い出してきた。

これは、”三月兎”^{マーチヘア}の”狂った茶会”^{マッド・ティー・パーティー}だ。

「あアその君、君も座りナヨ？ 余所者でも大歓迎ダヨ？」

「え？ 俺？」

突然指差された。

といっても、指の第二関節まで袖が覆っているので、どう差したかは分からなかったが。

「じゃ、じゃあお言葉に甘えて…」

このときは知らなかった。

後ろから迫りくる脅威の存在に。



”それ”は走っていた。

肩からはドロリと生暖かい、真紅の液体が流れ出し。

額に滲む汗は、明らかに尋常ではない量で。

「…クソ…」

悪態をつく”それ”を追うのは、鎧姿の兵士達。

「…しつこい！」

振り向きざまに、拾っておいた小石を投げつける。

『…ッ！？』

「…きなさい…：…きなさい、少年。起きなさいってば」

「あ…ああ？」

真っ先に見えたのは、覗き込んでいる帽子屋。

「オオ、生きてたネ？すごいネ、すごいネ？」

「おおー…」

三月兎が、両手の袖を叩いてはしゃいでいる。

「大丈夫かい？」

白兎も、こちらを覗き込んでくる。

「あー…痛ー…ってさっきの奴は！？」

勢いをつけて上体を跳ね上げる。

「私ならここだ」

声が出したのは、丁度テーブルの向こう側。

「の野郎…て、怪我してるのか？」

そこにいたのは、足首まで届きそうな、癖のある金髪をした少女。

異様なのは、ツリ気味な瞳のその色と、その服装。

瞳は、綺麗な鮮血色をしていて、その凹凸の少ない身体を覆う服装は、陽気なこの場には合わない、細身の黒いロングコートであった。そして足元を固めるのは、ああ、また痛そうな外見じゃないかと言いたくなる黒いブーツ。

白い肌と端整な顔立ちは、もう見慣れたので特筆しない。

怪我とは、ザックリと切り裂かれた肩の傷のことだ。

「すまん、まさか避けんとは思わんでな」

一体何なんだよ、という前に。

「はやく止血しないと…」

「ん？こんなのかすり傷…」

「かすり傷が腐って死にました、じゃ笑い種だろ？ああでも包帯が…」

このへんが、ヤンキーなのに保健委員をやっている所以である。

「包帯なら持っているぞ。：ほら、ここに」

言った帽子屋は、なんとシルクハットの中から包帯一卷き分を取り出した。

「便利だな、それ：」

「ティーセットもあるぞ」

「いい、出さなくていい」

止めると、なぜか残念そうな顔をする帽子屋。

「ほら、傷口みせろ」

「かすり傷だと言っただろう？それに、ほら：」

切り裂かれたコートの肩部分を捲る。

「：治ってる？」

「私は人より頑丈なのだ」

ふふん、と得意げな顔をする。

「そーなのかー：」

平均並な身長の俺より頭一個分低いのにな。

「む：まずい：しばし匿ってくれんか？」

「ンン？良イデスヨ？何時間でもいてクダサイ？」

「感謝する。では：」

言って、テーブルの下、テーブルクロスの中に潜り込む。

その直後。

『どこだ！？』

『まだ近くにいるはずだ、探し出せ！！』

ドタドタと駆けて来る、全身鎧の集団。

「なんなんだい、この騒ぎは？」

『貴様達、この辺に怪しい者が来なかったか？』

「来てナイヨ？それよりワタシはあの丘の向こうが怪しいと思うヨ？」

意外、三月兎は人に親切だ。

『おいおい、君はそんな嘘をつくのかい？』

鎧の中のくぐもった声ではなく、どこか遠くから響くような声。

「…何の用だ、”チェシャ猫”？」

三月兎に呼ばれると、急に芝生の上に人が現れた。

「なあに、この辺に怪しいのがいたから、親切に教えてただけさ？」

赤と紫の縞模様のセーターを着て、藍色のジーンズを履いた、線の細い、紅毛の男。

「今すぐそのお喋りな口を引き千切ってやろうか？」

まったく訛りなく喋り始める三月兎。

なにか言い知れぬ恐怖を醸し出している。

『そういえば…貴様、このあたりでは見ない顔だな？』

「え？俺？」

鎧姿の兵士が、槍の穂先をこちらに向ける。

『貴様も”あの女”の仲間か？』

「待て待て待て、どの女の話してるのかも分からないぞ、俺は」

『関係ない。こいつも連行するぞ。縄を』

『了解』

「は？ちょ、おい！？」

物凄いスピードで、和兎を縛り上げる。

「待て」

なんと。

さっきの少女が、テーブルの下から出てきた。

「…連れて行くなら私にしろ」

『そんなところに居たのか…そいつも連れて行け』

やはり物凄いスピードで、アイツも縛り上げる。

「おい、ちょっと待て…」

和兎が喚くが。

『黙らせろ』

『了解』

ゴス、という鈍い音を最後に、意識が遠のいていった。

「…うう、あー…」

今日は何度も意識が飛ぶ日だ。

「大丈夫か？」

「お…？おお…」

誰だっけ？誰だろう…

ああ、さっきの。

「って、ここは？」

「城だ」

やっと確保できた視界に映ったのは、月明かりが差す、薄暗い部屋。

「城といえば…」トランプ」の？」

「ん？知っていたのか。そう、ここは”ハートの女王の城”」

見る限り、二人とも縄は外されている。

「そういえば少年よ、名は？」

「あ、名前？そういうや言ってなかったな…俺は柊和兔。”平和”の

”和”に”兔”でカズト」

「ふむ、なかなか良い名だな」

「そういうアンタは？」

「私か？私は…」

その言葉は、扉を開く音に掻き消された。

『陛下が面会なされるそうだ、出ろ』

開いた扉の前に、兵士が立っている。

「行こう」

少女が立ち上がる。

「でも…」

「今は、ここにいるよりマシだ」

「…分かったよ」

一息おいて、和兔も立ち上がる。



兵士達に槍の穂先を向けられつつ連れてこられた部屋は、かなり広く作られていた。

見た目は、かなり悪趣味だ。なぜなら、全てが紅く染まっているから。

絨毯も、カーテンも、タペストリーも、飾られている花ですら、全て紅い。

部屋が一番奥には紅い玉座が据えられ、そこには、紅い王冠と紅い扇を持って、ハートを散りばめた服を着た、紅い髪の若い女性が座っていた。

「ようこそ、我が城へ。ところでそちらは、胴から首を落とされるのと、首から胴を奪われるの、どちらが良いかのう？」

いきなりストレートな質問をして、碧眼を細めて、広げた扇で口元を隠して笑う、ハートの女王。

「結局同じじゃないか、女王よ。やはりどこか欠陥があるのだな」挑発的に嘲笑する少女に。

「ふむ。やはり明朝なぞ待たずに、即刻首を刎^はねるか」

女王は、やや楽しそうに呟く。

「その方が安心できるものなあ？ビクビク怯えるだけの臆病者は」余裕の笑みを絶やさない彼女に、とうとう女王が”キレた”。

「衛兵ッ！！いますぐその下衆の首を刎ねよッ！！」

さっきまでの口調とは打って変わって、顔を怒りに染めて、喉が潰れるほどに叫ぶ。

『Yes, you're Majesty!!』

マジエスティー…確か威厳だとかそんな意味だったなー…

などと考えつつ、部屋の端（距離にして60m）から、穂先をこちらに向けて突撃してくる数人の兵士をぼんやりとながめていると。ちなみに。この場合の Majesty は”陛下”という意味合いになる。

「時に、カズトよ」

少女の背中ごしに、凜とした声が聞こえた。

「ん？何だよ？」

もう色々と諦めた和兎は、日常と変わらない声で返す。

「私には、名前がないんだが…」

「そーなのか？」

「ああ、だからな、カズト」

彼女は僅かに振り返り。

「名前をくれないか、私に」

浮かべられた微笑は、寂しそうで、哀しそうで、嬉しそうで。和兎はぼんやりと、ずっと眺めていたいな、とか思っていた。

「あー、じゃあ…」

ガシャガシャと煩い音が、未だに距離を詰められないのはなんですかーという思いとともに、呟いた。

「あー、アリス…」

そういえばアリスの”トランプの兵隊”は、明らかに走りにくそうな外見だったし。

「ふむ、アリスか…良い名だ。それにしよう」

「え？あ、何？」

いまいち聞き取れなかったのだが、そんなことを、少女は気にも留めない。

「よし、カズト。逃げるぞ」

「は？なんだよいきなり？」

”アリス”が振り向き、右手をこちらに差し出す。

「行こう、こんなところ抜け出して」

そんな時、やっと兵士達があと1mというところまで迫ってきた。

「邪魔なんだよ」

和兎は見えなかったが、彼女が振り返った先にいた兵士達を見た。
黒く歪んだ少女の顔を。

しかしまあ、見えたのはそこまで。

あとは、飛んでくる掌底と、拳しか見えなかった。

『ガッ…』

『ゲフ…』

二人は顔を掌底で潰され、また別の二人は、拳で鎧の腹部を潰された。

どちらにしても、噴き出したのは血ではなく、何枚もの、それぞれに絵柄が統一されたトランプの破片だった。

「うわ…ズタボロ…」

正直な感想を漏らし、潰された鎧を見て、閉口した。
余計なことは言うまいと。

「…?? どうかしたのか?」

「いや、なんでもない」

せめて兵士に手くらい合わせてやろう。合掌。

そんなことを済ませてる間に、アリスの手で、というか全身凶器かというくらいの圧倒的戦力で、兵士達が次々とズタボロになっていく。

「何故じゃ!?! 何故これ程までの戦力差が!?!」

もう恐れ慄くくらいしかできないだろう、ペラ紙の集団は。

「さて…あらかた片付けたし…行こうか」

「行くなって…階段から?」

聞くんじゃなかったな、と少し後悔してみよう。

何故って?

返ってきた答えが――

「いや、窓から飛び降りよう」

――だったからだ。

「待て待て待て、ここかなり高いところだぞ？ バカ言っちゃいけないよ」

外を見やると、まあ、背の高い木々が小さく見えること。

「安心しろ、ちゃんと抱えて飛んでやるから」

いや、そんなニコニコしながら言われても……

いやいや、鎧の頭部分掴んで窓に投げるなよ、とかそんなことを思っ
てみたりしていると。

「ほら、行くぞ」

唐突に腕を掴まれ。

唐突に窓からダイブさせられた。

「無理無理無理無理、無理だつてえええああああああ――」

――」
地面が、グングン近づいてきた。



「………生きてる？ 俺、生きてる？」

若干感覚が麻痺しているが、確かに、背中に地面を感じる。

「意外に高かったが、なんとかかなったろう？」

髪やら服やらに葉っぱが付きまくってるアリスは、ニコリと笑う。

「…なんとか死なない程度だったかな」

「気にするな。それより、お前は”外”から来たんだろう？」

「はい？ なんでそれを？」

「まあその服を見ればなんとなく」

そういえばこの格好、童話には些かラフ過ぎるか。

「ああ、そうだ。ついでにあれも見えていくか？」

「あれ？あれって何だ？」

それにも、ニコリと笑って答えた。

「見れば分かるさ」



「うおおおおおおお…な、何じゃこりゃあ…」

目の前にそびえ立つのは、10mは裕に超える、巨大な結晶。

「私が知っている限りでは、こいつはかなり昔からここにある」

「一体なんなんだ？ただの水晶か？」

よく見ると、僅かに内側から発光しているようだ。

「ちよっと手の平を置いてみる」

「こ、こうか…？」

言われたとうり、水晶に触れる。

「ん…？」

なぜか、水晶の発光が強まった。

「おいおいおいおい、何です何ですか何なんですかこれは」

「”帰り道”だよ」

ズブズブと、水晶に手が引きずり込まれる。

「ノオオオオオオオオオオオオオ！？」

落ちる落ちる、面白いくらいに。

どこまでも落ちて、下は固い地面だった。



「い…たー…」

背中が固い地面に着いている。

そして、肋骨の真上に異常な圧迫感を感じる。

「ふむ、ちゃんと出られたな」

声は、圧迫感の更に上から聞こえる。

「は、速くどいてくれ…」

倒れた和兎の上に、アリスがちょこんと座っていた。

「おお、そうだったな」

ヒョイと飛び退くと、今度は辺りを見回し始めた。

「凄いな…こんな大量の本、見た事がない」

「そうか、そりゃよか…って、ここは…」

もと居た、あの大図書館。

「ヤバ…今何時だ？」

急いで図書館中央の柱時計（天井スレスレの5m級）を確認しに走る。

「和兎？」

「え…？」

なぜか、和兎の友人・工藤冬弥くどうとうやが、柱時計の前に立っていた。

「あれ、お前帰ったんじゃない？」

あっちで、おそらく半日くらいは経っているはずなのに。

「何言ってるんだい？君が面白い物見つけたーとか言い出してから、まだ三分も経ってないよ」

「は…？」

と、そこへ。

「何をしているんだカズト？」

アリスが遅れてやってきた。

「え…誰？」

「あ…あー、あれだ、ほら。知り合い？」

少し苦しいか…？

「へー…意外に知り合い多いね」

「お、おうよ」

真顔で受け流してくれた。

友人のこういうところには度々助けられる。

「あ、そろそろ綾瀬^{あやせ}さん達来るってさ」

「げっ、綾瀬は流石に…」

あの風紀^{かたぶつ}委員は流石に誤魔化せないだろう。
これは…所謂ピンチだ。

—了—

第一話：カイコウ（後書き）

さてさて、いかがでしたか？

流されやすい性格は主人公にピッタリだなんて思っている朝宮脱兎がお送りしました。

脚本：歌成音ムイ

アイデア：モタモさん

と、グループ方式でやらせていただいております。
皆様の評価、お待ちしております。

第二話：タイドウ・1（前書き）

タイトルは”胎動”です。
なにかが動き始めるという意味合いで。

第二話…タイドウ・1

「はー…不幸だ…」

何が不幸って、まさしく今の状況が不幸だろう。

「僕はただ静かに過ごしたいだけなのに…」

図書館で騒ぐのはよっぽどの奇人だと思っていたら、まさか友人達がそうだったとは。

少年はそんなことを、”帝王学”について書き連ねられた本を読みながら考える。

「信じられるわけないでしょ！？どっから誘拐してきたの！？」

と問い詰めるのは、腰より下に伸びた長い黒髪と、眼光鋭い、深い黒の瞳をした麗人、我が校の名物風紀委員、綾瀬螢^{あやせけい}。

「だあかあらあ！！」

幼なじみからの詰問を受け、慌てているのが、友人の柊和兎。

「酷いですよ先輩、こんな小さな娘を…」

と、若干涙目で言っている、襟辺りで揃えられた栗毛と、薄いブラウンの瞳の線の細い少女が、和兎と、少年・工藤冬弥、更に螢の後輩である神谷静音^{かみや しずね}。

「違うって言ってるだろう！？」

そんな三人をよそに、我が校の留学生であるメアリー・オブライエンと、まさに嵐の中心地にいる”アリス”という少女は、楽しそうに会話など交わしている。

「ねえ、図書館では静かに…」

注意しようとは思うが、誰も聞いていない。

「静かにしろ馬鹿どもがあああ！！」

と、騒いでいた彼ら（静音を除いた二人だが）に鉄拳制裁を加える、当図書館の司書係、速水薫^{はやみかおる}（27・独身）。

キツイツリ目に眼鏡、かなり有能そうな外見の女性。

美人なのだが、男勝りな性格と、他人より少しばかり早い手が祟っ

てか、未だに貰い手の見つからない、そんな女性。

あと、『その年で染めた長い金髪を後ろで纏めてるってどうなんですか』というのは禁句だ。

「い、痛いじゃないですか薫さん……」

「図書館で騒ぐからだ、馬鹿者が」

「……貴女も相当騒がしいですよ……」

一人溜め息をつく冬弥。

「ホント、手加減しないよな……」

「私の辞書に手加減の文字はない」

「かつこよくない、かつこよくないから」

頭頂部を抑えながら、和兔がぼやく。

「じゃ、私はまだ仕事があるから」

後ろ手に手を振って、さっさと司書コーナーへ歩き去ってしまった。

「……それで？百歩、いいえ、万歩譲って誘拐じゃないとして、この娘はどっから来たのよ？」

ようやく痛みが引いたのか、螢は更に問い詰める。

「あー……言っちゃっていいのか？」

ふと、和兔がアリスの方を伺う。

「別に構わないぞ、私は」

相変わらず、どこか上から目線で話している。

「よし、じゃあ言うぞ？言うからな？」

「勿体ぶらずに言いなさいよ」

そして和兔の口から紡がれた言葉は。

「アイツは、本の中から出てきた」

「……………」

呆れて物も言えないという顔の螢に。

「あの……先輩？熱でもあるんですか？」

手を和兔の額に当てて熱を計りだす静音に。

「和兔、ファンタジーの読みすぎだよ」

未だに本を手放さずに言う冬弥に。

「現実逃避もほどほどが大事だよ？」

”イギリス産の電波少女”と名高い（呼んでいるのはこのメンバーだけだが）メアリーにすら諭された和兔は。

「：じゃあ体験してみりゃいいじゃん」

開き直ってこう言った。

その辺の棚から本を一冊取り出して、机の上に広げる。

「全員手エ繋げ！離すなよ！？」

全員が手を繋いだところで、和兔も手を繋ぎ、本に手を置いた。

「行くぜえ！！」

”ズルズル”と。

和兔の手が、本に引きずり込まれていく。

「え、え？ええ！？」

気付いた時には、全員引きずり込まれていた。



「痛ー…って、ここどこよ！？」

「森の中、みたいだけど…」

見回した景色は、まったく知らない景色だった。

「なんかファンシーなキノコとか生えてるよ…？」

と、常軌を逸した極彩色のキノコを指先で突付いているのは、砂金色の程よく短い髪をした少女・メアリー。

「な？言っただろ？」

してやったり、とでも言いたそうな和兔に、

「はいはい分かった、分かったから、早く帰りましょう」

螢は若干の焦りを感じながら急かす。

「分かれば良し。それで————」

ちらりとアリスを見て、

「——どうやって帰ろうか？」

そうのたまった。

「はあ!？」

「まさか帰り方も分からないのに連れて来たのかい？」

「いや、つい勢いで…」

「だからアンタは計画性がないっていつとも言われんのよ!!」

「先輩、勢い任せはダメですよー!…」

「落ち着け皆。帰り方ならある」

アリスが面倒くさそうな声で口を挟む。

「前の時のように水晶を探し、そこから帰ればいい」

「いや、あんなのがまたあるとは限らないだろ？」

「必ずある。アイツがそう言っていた」

そう言って、サクサクと一人歩を進めようとする。

「…って、アイツって誰だよ？」

若干の不安を感じつつ、和兎は聞いた。

「…?…はて、誰だったかな」

不安は、的中した。

「そんな怪しげな話を信じろと!？」

「う、うるさい! まだ小さかったんだから、仕方ないだろう!」

ぎゃーぎゃーと喚く二人を取り巻き、残った4人は、この状況を理解出来ずに呆然としていた。



「ところでアーレン、あれをどう見る？」

男は、もう一人に向かって、呟く。

「さてな、ただの異分子か、それとも最悪のウィルスか：今言えることは、まだ放置しておいても問題は無さそうだ、ということか」
アーレンと呼ばれた男が、ゆったりとした口調で返す。

「ふむ：お前はどうか、ヴィアージョ」

「それはあれか？うん？俺にあれを潰せってか？」

「そうだな：」 功を焦った仲間が暴走”：というのも、面白いかもしれないな」

最初に口を開いた男――マクシミリアン・テルミドールは、静かに笑う。

「さて、行こうか。この時間は限りなくあるが、我々が存在する時間ごくわずかだ」

そんな彼にアーレンは。

「君は相変わらず回りにくどいな」

やはり笑って返したのだった。

第二話：タイドウ・1（後書き）

さて、最後に謎を残して第二話第一幕エンドです。
なんで分けるのかと言うと、作者が遅筆だからです。
オチは見えてますので、過程を埋めれば完成です。
それと、今回初出のキャラの一部と、この後から登場するキャラの
名前の一部は、多作品から拝借する場合があります。

第二話：タイドウ・2（前書き）

どうもです。

遅筆が未だに抜けませんが、しばしお付き合いいただきたいと思います。

第二話…タイドウ・2

もう何でも良くなって、とにかく歩こう、という冬弥の提案で、見たこともない森を歩く6人。

「こんな鬱蒼^{うつそう}としてののに、あんまり湿度が高そうじゃないねえ…」

「おそらく童話だからだろう。湿気がどうか言及されないからな」
メアリーの疑問に、先頭を歩くアリスが答える。

「おい、あれ家じゃないか？」

先頭二番目の和兎が、前方を指差す。

「…ボロく、ない？」

控えめに、螢が呟く。

「童話だからな」

なんだかもう便利なワードになりつつあるそれを返し、目の前の家を眺める。

「…あれは…」

冬弥は家の中を見て、呟く。

「なんでこんなことくらい出来ないのかねお前は!？」

そんなことをキーキーと喚き立てながら、母親と思しき人物が、ロボロの服を着て、家の掃除をしていたのであろう少女を叱りつけているところだった。

「ヒドい怒りようですね…」

静音がその光景から、何か嫌なことを思い出したように目を背けた。

「…童話、でこんな仕打ちと言えば…」

「シンデレラ、だよな？」

冬弥とメアリーは頷き合っている。

「で、どうする?止める?それとも見過ごす?」

二択を提示しつつも、螢の目はやる気満々だ。

「しゃーない、止めるか」
ヘタレとは言え、一応喧嘩慣れしている和兎も、踏み込む準備をする。

「まあいいわ。母さん達は舞踏会に行ってくるから、ちゃんと掃除を済ませておくんだよ!」

「ヤバい、隠れろ!」

母親と思しき人物が、着飾った娘三人を引き連れ、家から出てきた。

「:行ったか?」

「といふかなんで隠れたの?」

「見つかったも特に問題ないんじゃないかな」

「しかし何故こんなところに:」

「だあもー! 一辺に喋んな!」

なかなか連携の取れない一団は、しばらく様子を見ることにした。



「アーレン、そろそろか?」

「間違いないようだ、テルミドール」

そんな二人の後を、ヴィアージョはつまらなさそうに歩く。

「これか:」

テルミドールが巨大な水晶を見上げる。

「:!! こんなときに邪魔が入るとは」

アーレンが茂みの向こうを見ると、そこには、忌々しい、奴らが居た。

「見つけたぞ、反乱分子共が!!」

ダークグレーの軍服を着たそいつらは、持っていたアサルトライフルの銃口をこちらに向ける。

「ヴィアージョ」

「待ってたぜえ、アアアレエンン!!」

実に楽しそうな叫びを挙げ、ヴィアージョは拳一つで、木々を薙ぎ倒し、特攻する。

「撃て、撃て!!」

ヴィアージョに弾丸が飛来する。

その全てを、ヴィアージョは拳で弾き、潰し、突き進む。

「クソッ…後退だ、後退しろ!」

発砲しながら、一歩ずつ後ろに下がっていく。

そのさらに奥から。

「お前らあ、もっと奥まで下がってろお」

間の抜けた声がした。

現れたのは、無精髭をたくわえた、オールバックの黒髪に、薄縁の角レンズ眼鏡を掛けた、黒い軍服を着た男と、同じく黒い軍服の、長い金髪と深い色をした碧眼の女。

どちらも年が読めない。

若いようにも、老成しているようにも見える。

「ヒューブか…厄介だな…」

「潰すぜえ、アアアレエンン!!」

ヴィアージョは、先ほど弾丸を弾いた時のように拳を魔力で覆い、ナックルガードのような性能を持たせる。

「だっしやあああああ!!」

それを見た男・ヒューブは、ニヤリと口の端を歪める。

「良いねえ良いねえ、やっぱ男はそうでないとなあ!??」

自らも拳を握り締め、魔力を集中させる。

「ラフカット」!行くぜえ!

「レッドラム」、受けて立つ!

二人の拳がぶつかり、辺りの木々が揺れ、葉のほとんどが吹き飛ばされた。

「ハッハー!!!どうしたどうしたあ!?!さっきまでの威勢はあ!?!」

ギリギリと力が拮抗した後、ヴィアージョは後方に吹き飛ばされた。

「テ、メエ：」

ヨロヨロと立ち上がり、まだ拳を握ろうとするヴィアージョを、アーレンが手で制止する。

「退くぞ、ヴィアージョ」

「チツ：仕方ねえか：」

それを見てヒューブは、愉快に笑う。

「逃げろ逃げろお！せめて生きて俺と闘うまではなあ！」

それ以上は、何も無かった。

何も、無いままだった。

第二話：タイドウ・2（後書き）

いかがでしたでしょうか？

文章力の甘さを痛感しますが、これからさらに進歩していきたいと思っておりますので、改善点などお送りください。

皆様の評価、お待ちしております。

第二話：タイドウ・3（前書き）

今回は予想外の文章追加ということになりましたので、いつもより内容が薄っぺらいです。

どうか次回に期待してください：では、どうぞ。

第二話…タイドウ・3

「もうすっかり夜だな」

と、夜空の星を見ていたアリス。

「お腹空いたかも…」

「メアリー、その奇抜なキノコは食べちゃダメですよ」

空腹からか、ファンシー極まりないキノコに手を伸ばすメアリーと、それを止める静音。

「ねー、何を待ってるのー？」

いい加減飽きたのか、退屈そうに言う螢を黙殺して、和兎と冬弥はジッと小屋を見守っていた。

「そろそろだね」

「ああ、そろそろのハズだ」

二人が待つのは、”あの人物”。

「来た…！」

「おお…！」

そこに現れたのは、そう、黒い三角帽に、黒いローブを着た、謎の塊。

謎めいた、魔法使い。

「ちよいとそこな娘さん」

「私、ですか？」

ボロボロの服を着た少女は、窓から話し掛けてきた魔法使いを見て、掃除の手を止めた。

「そう、お前さん。お前さん、舞踏会に行きたくはないかい？」

やけにフレンドリーに話し掛ける魔法使い。

「でも私、掃除を済ませないと…」

「いいよいいよ、私がちよいと終わらせといてあげよう」

どこから取り出したか、折れ曲がった長い木の杖を一振りすると、

家の中も外も、一瞬で新品のような輝きを放つまでに綺麗になる。

「凄い：でも私、ドレスが：」

「何々、そんな物、私が用意してあげるさ」

また杖を一振りすると、少女の着ていたボロボロの服が、煌びやかなドレスに変貌した。

「わあ：でも、今から歩いたのではとても舞踏会には：」

「何々、そんなのひとつ走りな馬車もあるよ」

ローブの下から、カボチャ一個と鼠三匹を取り出し、杖を一振りする。

すると一瞬で、カボチャは立派な馬車に、鼠二匹は立派な馬に、残りの一匹は立派な御者に変わった。

「本当に凄い！でも良いのかしら：」

「ほらほら行っておいで。但し、私から離れると魔法の効果が弱くなるから、注意するんだよ？」

「え：？」

「その馬車は大丈夫だが、その服はかなり無茶をしたからね。私から離れてると、12時には効果が無くなってしまうから、その前に舞踏会を抜け出すんだよ？」

「分かりました、親切な魔法使いさん」

少女は馬車に乗り、後ろの窓から魔法使いに手を振った。

馬車がグングン速度を上げる。

「これでよし」

魔法使いは呟く。

「全く王子ともあろう者が：あのような田舎娘に一目惚れしたから、あの娘を舞踏会に出させろとは：全く：まあ嫌がらせに12時で解けるような魔法しか掛けなかったけど」

カッカカッと高笑いする魔法使いを見て、驚く。

「まさかあれって：」

驚愕を隠せない冬弥に、

「王子の陰謀だったのか…?」

この出来事をどう受け止めればいいのか分からなくなっている和兔。
「ん?何をそんなに驚いているのだ?」

こんなのが普通なのか、アリスはいたって冷静だ。

「美しい話の裏側を見た気分なんだよ…」

げんなりとした表情で、和兔は言葉を吐き出した。

「でもこれだと、ちゃんと辻褄が合いよね。なんで魔法使いがそんな無駄なことするのか不思議だったんだよねー」

それでいいのかメアリー、と2人は言いたげだったが。

「誰かいるのかい?」

「気付かれた!?!」

「問題ないんじゃない?魔法使いになら」

諦め半分に、冬弥は言う。

「あ、それもそうか」

思い立って、茂みから出る。

「ふむ!?!今を見られた訳だね私は!?!」

それを見た魔法使いが、不敬罪現場を目撃されたことに気が付いて、
驚愕する。

「ああ、安心してくれ。別に告げ口しようなんて思っていないから」

「本当に?」

「本当に」

「それなら良いんだ、それなら」

言って、魔法使いは胸を撫で下ろす。

「あ、そういえば…食べ物とか出せたりする?」
なんて、螢が言い出した。

「食べ物?物によるけど、出せるさ」

「やった!ほらほらメアリー、お腹空いてるんでしょ?」

「本当!?!じゃあ魔法使いさん、温かいスープとパンを要求します」

！」

「鳥のスープかい？それとも野菜のスープ？」

「鳥で！」

「よしよし。もういつそ人数分出そうかね。君は？」

「じゃあ：サーロインをウェルダンで」

「なかなか厄介な注文を：もやしの癖に：そっちの君は？」

「もち牛ヒレミディアム！」

和兎は好物の名を叫んでみる。

「だからなんでそう厄介な：君は？」

「シンプルに牛のも肉を直火で炙った物を」

意外に粗食なのか、アリスは不敵な表情で注文する。

「まあそれなら：君は？」

「私は野菜スープとパンが良いかな」

実にヘルシー思考なものを注文した螢。

「あー：綾瀬さんと同じものを」

最後に、控えめに静音が言う。

「よし、食卓と椅子、それにテーブルクロスとキャンドルに花：そ

して食器と料理を：」

杖を何振りかして、希望通りの物を次々と出していく。

全員が席につき、手を合わせる。

「いただきます」

「あれ：なんかさっきもやしって：？」

既に過ぎたことを思い返し、冬弥は不可解なものを抱えていた。

「いやー食べた食べた」

何度もおかわりを繰り返し、その都度愚痴をこぼされた和兎は、満
足気に笑う。

「味まで再現できるなんて…凄いですね」

「なあに、これでも王室御用達の魔法使い、そこいらの料理店以上の味なんて、味わい尽くしてるからね。再現するなんて簡単だよ」
それぞれ感想を言っていると、馬車が帰ってきた。

「おや、もう12時か…みんな、隠れてなさい」

ガラガラと大きな音を立てて、馬車が向かってくる。

「…？ 様子がおかしい？」

近づくにつれて、場所の所々が破損しているのが見えた。

「これは————」



第二話：タイドウ・3（後書き）

脚本にないパートなんて書くんじゃないかなあという回でした。改善点などありましたら感想からお送りください。ではまた次回。

第二話…タイドウ・4

「あの馬車…」

よく見ると、全体が完全に穴だらけだ。
まるで、銃弾にでも撃ち抜かれたように。

「あ、あれって中は——」

無論、穴だらけだろう。

それは正直、かなりマズイ気がする。

「おい、大丈夫か!？」

「うう…」

運の良い事に、ほとんど無傷だった。

「よかった…無事だ」

「でも、これって一体…」

螢が不安そうに当たりを見回す。

「あれ、何ですかね——」?

メアリーの指差した方向に、黒いバギーが三台ほど停車してあった。

「おい、あれ、明らかに童話じゃないよな？」

「まあ、これがミリタリーな童話なら分かりますが」

メアリー、そんな童話はないだろう、と冷静な判断が効いたのは冬弥だけだった。

「この辺りにいるはずだ、探せ！」

「Sir, Yes Sir!!」

装甲服を着込んだ6人ばかりの軍人が、方々に散っていく。

「…あー、あれだな、”やれやれだぜ”って状況だな」

「和兎、それはちょっと分かりづらい」

「冬弥、あれどうしよう？」

「うーん…綾瀬さんはどう？」

「ちょ、なんで私に振るのよ!？」

「…あれは少し不味いな…」

「…?」

僅かに聞こえた声に、冬弥以外は反応しなかった。

「何を探してるんだろうな、あいつら」

「多分——シンデレラじゃないかな?」

ちらりとそちらを見やり、頬を引き攣らせる。

「まあ何にしても——ああ魔法使いさん、竹刀出せる? 竹刀」

「竹刀か…ふむ、おやすい御用だ」

杖の一振りで竹刀を取り出し、それを投げて寄越す。

「うん、ピッタリだわ。ありがとね」

片手で試し振りをして、頷く。

「待てよ、螢。何するつもりだよ?」

「何ってそりゃあ…肅清だけど?」

事も無げに言う彼女は、疑問符を浮かべる。

「おま…相手は軍人だぞ? しかも竹刀って…」

「あたしはねえ…風紀委員会の——」

一人称が微妙に変わってる上に、表情も、雰囲気も、どこか違う。

これが、素の綾瀬 螢——

「”鉄血”の綾瀬よ?」

やらなくてもいいのに郊外まで出向いて暴走族なんて取り締まってるようなコイツだ。

この程度で臆したりしないだろう。

「…ってそんな間に突撃しますかアンタは!？」

早々に突貫を開始している螢。

「私も行こう」

いかにも楽しげな顔で、アリスが言う。

「お前もか…」

ゆったりとした動作で、かなりのスピードを出すアリス。

「なんかもう…」

「相手が可哀相だよね…」

「おい、何だあれは!？」

竹刀片手に突撃してくる少女と、もはや何も持たずに、ある意味優雅に向かってくる少女。

「1人目!」

構える暇もなく、一人目の軍人が顔面を殴打され打ち倒される。

「この…!」

2人目はなんとか小銃を構えるが、

「シッ」

短い呼吸とともに放たれたアリスの肘撃ちをモロに脇腹に喰らい、悶絶する。

「クソ…なんて奴等だ!」

明らかにヤラレ役のセリフを吐く3人目。

すぐあとに鳩尾に裏拳を喰らって、バギーに放り込まれたが。

そこからはまあ、銃撃もあったが…一般人からかなり外れた速度で動く竹刀女と、銃弾をモロに喰らってなおも迫ってくる黒コートの前に、敵はいなかったわけで。

「あー…これなんて惨劇でしょう?」

「あのダム建設騒動の村よりはマシじゃないかな?」

まさに死屍累々。

呻き声を挙げている兵士達は、折り重ねられ、アリスに座られている。

「さて。この状況から見ると、多分君達は、城の方から来たんだろうね」

緩く握った拳を口元に当て、探偵みたいに思案する冬弥。

「そのあたり、詳しく聞きたいんだけど？」

どこか醒めた目で、人間椅子と化した兵士を見る。

「誰が”巡礼者”なんぞに…」

吐き捨てるように言ったあと、ガックリと意識を失った。

強く殴りすぎじゃないだろうか。

「”巡礼者”…また謎の多いことを…」

思案する内容が増えた為、冬弥が黙り込む。

「まああの方向から来たんだから、シンデレラ城にまだ居るんだろ、ああいうのが」

「それは間違いないだろうね。この銃の口径とあの馬車の弾痕が合わないし」

確かに、アサルトライフルごときに直径10cmの穴は空けられない。

「で、やっぱり城に行くのかい？」

螢の方を向いて訊いた。

「当然よ」

「無論だな」

まったく同時に、螢とアリスがのたまった。



第二話：タイドウ・4（後書き）

いかがでしたか？

今回は少しばかり話が進行できたと思っています。
やっとタイトルの由来が出てくるあたりなので。

第二話：タイドウ・5（前書き）

前回の投稿からはや一ヶ月：
遅筆に拍車が掛かってきましたが、学生故どうかご容赦を。
それではどうぞ。

第二話…タイドウ・5

若干の危険性から、和兎・冬弥・螢、更に魔法使いが、新品の馬車に乗って、シンデレラ城までやっては来たが。

「あれ…何、この惨状…」

そこに広がっていたのは、死んでこそいないものの、大量の血を流して倒れている兵士達。

なかにはダークグレーの軍服姿の者もいた。

それが何十人以上も。

と、そこへ。

「ハッハー!! まだ生き残りがいたかあ!？」

階段の踊り場から現れたのは、褐色の肌に、髪質の悪い黒い短髪をした、筋肉質の男。

タンクトップに迷彩柄ベストを来ているので、隆々とした腕が剥き出しになっている。

「おいおいおいおい…なんだよあの暑苦しいのは…」

「何でもいいわよ、そんなの」

言いながら、正面に竹刀を構える。

「どっちにしろ、粛清してやるわ」

怖いくらいにいい表情で、筋肉男に斬り掛かる。

「だっしやああああああああああ!!」

彫りの深い顔を歓喜に歪ませ、振り下ろされる竹刀に拳を叩き込む。

「な…!？」

竹刀が、拳の当たった部分からバラバラに四散する。

「ハッハー!! そんなもんかあ!？」

「なんて馬鹿力…」

刀身のなくなった竹刀を呆然と眺める。

「竹刀追加で!」

「言うと思ったよ」

飲み屋みたいな注文に文句も言わずに竹刀を投げ渡す魔法使い。

しかし、なぜかその竹刀は黒かった。

「何、コレ？」

武器がない状態の相手とは戦わないのか、筋肉男は構えたまま動かない。

「少しばかり特別仕様にしておいたよ」

ケラケラと笑う魔法使い。

「何か…感じ悪い気が…」

刃先から柄尻までドス黒い竹刀をやや引き気味で構え、筋肉男と向き合う。

「だっしやあああああああああ！！」

両腕を後ろに引いて突っ走ってくる。

「この…ッ！」

それを、真正面から迎え撃つ。

「らあああああああああああ！！」

なんと拳で白刃取りをやったのける筋肉男。

また碎けるかと思いきや、僅かな歪みも傷もなかった。

「チッ…もう一つばあああああッ！！」

一発と言いながら数十発は打ち込んだが、まったく効果がなかった。

「やっぱり効くねえ、”護法式装甲”は」

「ごほ…何だって？」

まず間違いなく、童話の魔法使いから発せられるはずのない言葉だ。

「護法式装甲：正式名称”権天使級護法式複合装甲”。触れた魔力を根源から浄化し無力化する複合装甲の中で、第七位にある物を指す。若干対魔力性能に劣るものの、装甲自体の硬度は申し分ない」

サラサラと流れるような言葉の端々に、かなりの違和感を感じる。

「あのー、魔法使いさん？貴方一体どこの国の…」

「ん？私の国は日本だが？」

「いやいや、と。」

「それはある意味問題発言では…？」

「当然だろう。私は、”シンデレラ”の親切的魔法使いなどではないのだから」

「…ハア!？」

何を言っただ、と。

お前確かに怪しいけどその発言は何だ、と。

「だいたい、元々シンデレラに魔法を掛けたのは魔女だ」
いやそりゃそうだけど。

「おお、そんな間にも」

魔法使いが開け放された城の中を指差す。

「ああ?…うわ」

そこには、真っ黒な竹刀を振り回す少女と、拳を振るう浅黒い大男と、同じく拳を振るう黒いロングコートの少女が…

「増えてるうう!？」

剣舞か何かに見えなくもないが、かなり凶悪な威力で繰り広げられていて、舞踏会用のホールのあちこちが欠損している。

拳撃が外れる度に壁が砕け、剣撃が外れる度に床が割れる。

「楽しそうだね、綾瀬さんもアリスさんも」

「いやまあ…：あー…」

ホントに楽しんでやっているに違いない。
特にアリスは。

「何をしている、ヴィアージョ」

踊り場の奥から響く、低く、穏やかな声。
でも、感情がこもっていない。

「目的は達した、撤退するぞ」

フラリと現れたのは、黒いマントですっぱりと全身を覆った男。

「…お前のお友達か」

「心外だね、その言い様は」

目深に被った三角帽の下でケラケラと笑う。

明らかに同類のような気がするが、本人は違うと言いたいようだ。

「チツ…またかよ」

残念そうに吐き捨て、一足で踊り場の上まで跳躍する。

「急げよ、次の予定が詰まっている」

マントの男が階段を駆けていく。

その後を筋肉男が追う。

「…あれは一体…」

「さて、ね…」

ただ呆然と見送る二人と、

「逃がすかぁ！」

「うむ、よく言った」

嬉々として後を追おうとする二人と、

「いやいやいや待て待て待て」

必死に止める一人がいた。



第二話：タイドウ・5（後書き）

いかがでしたでしょうか。

やはり文字での描写は難しいですね。

改善点などありましたらお教えください。
ではまた次回。

第二話：タイドウ・6（前書き）

また前回投稿から一ヶ月：相変わらず遅筆ですが、まだお付き合いください。

第二話…タイドウ・6

「惨状ですね、コレは」

気の抜けた声を謁見の間に響かせるのは、金色のサラサラヘアーに冠を被った青年。

「おお、これはこれは。殿下、ご無事でしたか」

やけに腰の低い物言いになった似非魔法使い。

「いままでどこに？」

「ん？寝てたよ」

「寝て…あの、主催者ですよ？」

「主催者は王様ちちうえだよ。僕はほとんど来賓扱いさ」

王子様がそんなんでもいいのだろうか。

「ところで殿下、しばし時間を頂きたいのですが」

「いいよ。行つといで」

軽いノリで答える王子。

「そういうわけだ、少し付き合ってもらおうか」

ズルズルと杖を引きずって外へ向かう魔法使いのあとに続く。



「さて、とりあえず君達には退場してもらおうか」

城の裏手で立ち止まり、いきなり宣言する。

「退場って…帰れるのか？」

「ああ、無論だとも。だが、とりあえずは連れを迎えに行かないとな」

言って、自分は森の奥へ分け入っていく。

「おい、どこ行くんだよ」

「少々準備をしないといけないんだ。悪いけど、迎えには君達が行ってきてくれ」

言い終わる頃には、とうに後ろ姿も見えなくなった。

「…何だっぺんだ、一体」

「それより、誰か馬車の御者なんて出来る？」

「「あ…」」

螢の質問に、この場の全員が固まった。

◆ ◆ ◆
「うえ…吐きそ…」

口を押さえて木の根元に蹲る和兔。

「なんて荒っばい…う…」

その隣で、木に手をついて何とか立っている螢。

「う…う…」

後部座席では、冬弥が完全にダウンしていた。

「だらしないな、この程度で酔うとは」

「お前なあ…」

一人だけ平気そうな、御者席にいたアリス。

「行きも帰りもこれ…」

誰となく呟き、誰からとなく沈み込む。

「皆さん無事ですかし？」

「おー…あ、やっぱダメだ…」

立ち上がりかけて、また蹲る。

「とりあえず2人とも、あれに…」

指差した馬車は、あちこちぶつけて傷だらけだった。

「一体何が———」

◆ ◆ ◆
「なるほど…こういうことでしたか…」

酷いなんてもんじゃなかった。

3人が振動で何度か頭を天井にぶつけた。

残る3人はもう少しで窓から放り出されかけた。

「あの…皆さん大丈夫ですか？」

「なんでアンタは酔ってないのよ…」

心配そうにオロオロしている静音を見て、螢が呻く。

「あ、私こういうのは慣れてますから」

「何で慣れるような状況になるのよ…」

「うち、中古車なもので…舗装された道路でも車体が跳ねるんですよ」

「神谷さん、それは早く買い換えるべきだと思うよ…」

悲痛な呻き声やら何やらが響く中、一行は森の奥へと分け入っていく。

◆ ◆ ◆
「遅かったじゃないか」

「まともに歩けなかったもんでな」

「何だ、それは暗に私を非難しているのか？」

「よほど御者が悪かったようだな」

魔法使いはククツと笑って、背後に置いてある豪華な姿見の鏡面を平手で叩く。

「さ、兎にも角にも全員これに入ってくれ」

「入るって…鏡にか？」

「そうとも。——大丈夫、顔面強打なんてネタ振りじゃないから」

「そんなドリフもやらないネタだったらタダじゃおかないからな」
和兔が鏡に足を突っ込む。

不思議とゆるゆる入っていく。

「う…おわぁ!？」

何かに引きずり込まれる感覚がする。

落ちる、落ちる、何処までも……————

——了——

第二話：タイドウ・6（後書き）

今回で第二話がようやく終了。

色々進展させていきたいので次回も長くなりそうですが、皆様のいい暇潰しになれば幸いです。

第三話：シンコウ・1（前書き）

今回は意外と早く仕上がりました。
眠気の中で書きましたので誤字があるかも…

第三話…シンコウ・1

目が覚めたのは、広い草原の真ん中だった。

「痛あ…何だよ一体…」

ドゴオオオオオオオオオオオオ——

「どわあ!？」

すぐ横に砲弾が飛んできた。

「う…わ…」

目にしたのは、草原の真ん中で交戦している多数の戦車や歩兵達。

「いやいやいや、これはもう夢だろ…ハハハ…」

血と硝煙と肉の焦げる臭いが鼻を突く。

「覚めろおおおおお!! いい加減に覚めろ俺ええええええええええ!!」

銃弾の雨の中、何とか戦場の外まで走り抜ける。

「やア、久しぶりー。3時間ぶりくらいカナー？」

手を振るのは、優雅に紅茶を啜っている、病的に皮膚が白い男。

黒尽くめの服、黒いウサギの耳、周りを囲むシルクハットの片眼鏡男や白い人型ウサギ、机に突っ伏してる男。

「適当なことを言うな。正確には2日と21時間34分ぶりだ」

細かな時間をいうが、三月兎は気にした風もない。

「そんなことより、なんだよこの状況は!？」

「サア? ワタシ知りませンヨ?」

「何でもダイトーアとか言う国がどこかの国と戦争をやっているらしい」

帽子屋が三月兎を制して説明する。

「ダイトーア? どの国なんだ…」

そんな中、突然戦場から怒号と轟音が響いた。

『本隊より本営! 未確認の戦力が介入!』

戦場の端まで逃げ延びてきた通信士が無線に叫ぶ。

『既に本隊の三割が壊滅！本隊長が撤退を提案しています！』

「え、何——」

何かが戦車や兵士を巻き上げ（それはもう波飛沫のように跳ね飛ばす感じで）、こちらに向かってくる。

「ちょ、まっ……！」

真っ黒い塊が、和兎にぶつか——りはしなかった。

「なんだ、カズトじゃないか」

「お、おうよ……」

顔の3cm手前に、白くて小さくて綺麗な拳が静止していた。

止まらなかったらまともに喰らっていただろう、鉄の塊を打つ拳。

アリスはフラっと身を引くと、三月兎の方を見やる。

「おお、久しぶりだな三月兎」

「オヤオヤ、名無しチャンじゃないですか」

何気なく挨拶なんて交わしているが、すぐ隣は戦場というこの異常な光景。

「ん？そう言えばカズト、他の連中はどうした？」

「あれ、お前と一緒にじゃなかったのか？」

「もしや、と。」

「はぐれたか……」

「この状況では少々厄介だな」

一応周りくらいは見えているらしい。

「おやおやあ？なんでこんな所に一般人がいるんですう？」

妙に間延びした声が聞こえてきた。

声のした方をみるとそこには、奇妙な女がいた。

猫背で細身、スラリと長いその身に纏っているのは、喪服のように

真っ黒な男物の着物。

そこまでは、まだいい。

問題は、腰に吊られたホルスターに突っ込まれているやけに長い日

本刀と、同じくホルスターに突っ込まれたゴツいハンドガン。極めつけは、顔に付けられた白い仮面。

目と口の部分が露出しているだけの、質素な仮面。だが何か、言いようのない薄気味悪さを醸し出している。

「あの…どちら様で？」

「これは失礼。ワタクシ ユウキシノ私、悠綺詩乃と申します。以後お見知りおきを」腰まで届く艶やかな黒髪を揺らし、仮面の女が近づいてくる。

「んん？よく見れば貴方、”巡礼者”ですねえ？それもかなりの原石の様子…今スグここで捕獲します」

「はあ!？」

いきなり刀を抜く仮面の女。

「さあ、大人しくお縄に——」

捕獲という単語は人間に大して使えるかというズレたことを考えていると。

「お待ちなさいな詩乃ちゃん」

仮面の女と似たような声がした。

「ね、姉さん…あの、どうかしましたかあ…？」

急に弱腰になる仮面の女の後ろに、また奇妙な女がいた。

仮面の女と違う点と言えば、黒い男物の着物を黒い男物のスーツにして、仮面を外したというだけだろう。

そんな女が、ニコニコと笑いながら歩み寄って来る。

「ごめんなさいね、愚妹が御迷惑をかけて」

「姉さんそいつらは——」

「お黙りなさい。人様にいきなり刀を向けるなど、それでも悠綺の一門ですか」

厳しい表情で一喝する。

仮面の下で表情は見えないが、明らかに萎縮している仮面の女。

「お詫びと言っては何ですが、私が安全地帯までご案内しましょうか？」

「…どうする、カズト」

「まあ、ここより安全なら…」



第三話：シンコウ・1（後書き）

いかがでしたでしょうか。

派手な演出を学びたい今日この頃な朝宮がお送りしました。

第三話：シンコウ・2（前書き）

どうも、前回より早い投稿となりました。

この時期は忙しいはずなのに指は速まるという不思議
それではどうぞ。

第三話：シンコウ・2

連れてこられたのは、濃緑色の大きなテントが乱立する場所。
スーツの女——刹那というらしい——が言うには、軍の本営だそう
だ。ベースキャンプ

「こちらへどうぞ」

そう言って通されたのは、一番大きなテント。

「——うん？」

中に居たのは、ザンバラに切った赤毛が特徴的な青年。

切れ長の双眸に縁なし眼鏡がよく似合っている。

「…能力者か」

カッチリした軍服の肩に付いた短めのマントを翻し、こちらを向く。

「悠綺姉、適当に始末しておけ」

それだけ言うのと、さっさと卓上——3Dマップが立体映像として
投影されている——に向き直る。

「この城が敵の拠点だとすると…北の山脈からは攻め込めないか…」

「東と西の道は一個大隊が占拠していますから…南の河川か、東か
西を無理矢理突破するかですね」

青年の陰になってよく見えないが、奥にいるもう一人と話している
らしい。

「…って、冬弥!？」

「和兔!？」

どうやら奥にいたのは、よく見知った冬弥だったらしい。

「なんで冬弥がここに？」

「あ、いや…才能ありそうだから手伝って欲しいって言われてね、
うん」

どこかそわそわした態度で答える冬弥。

「彼が如何にも有能そうだったのでね。——実際かなり優秀な”
策士”だよ」

青年が無表情で答える。

「さて：作戦が決まった。東西を占拠する敵部隊を排除しつつ、敵拠点に攻め込む。分隊長は悠綺姉妹、分隊には1番、2番、3番、4番隊を参加させる」

「了解」

「お任せを」

軽いノリで応えて、悠綺の二人がテントの外に出る。

「あとは――」

マントを翻し、テントの外に向かう。

「：あれ、置いてけぼり？」

「ついて行くか？」

突然のアリスの提案。

「：いいかもな」

「ちょ、和兔――！？」

「いいじゃん別に。なんたってこっちにはアリスがいるわけだし」

「いやあ、照れるじゃないか」

真顔で言われても説得力皆無だが、何しろ異常なまでの戦闘力をもっているのだ、この少女は。

「：いいよ。但し、僕も同行する」

「ん？当然だろ、そりゃ」

誰も付いて来るなどと言っていないのだから。

「さて、行くか――」



「あら、ついて来たんですか？」

もう既に居なくなってしまうていた部隊を追いかけると、どうやら悠綺姉の方に来たらしい。

「若いて良いわね。私なんかそんな無茶――」

言って、艶っぽく微笑む。

：見た目は若いが、実はかなりの年齢なのだろうか？

「詩乃——さん、しばらくお世話になります」

冬弥の今の間はなんだったのだろう。

「ええ、良いですとも」

でも、と付け足して。

「足手纏いになるなら問答無用で斬り捨てますからね？」

艶っぽい微笑みが、少し不気味に映った。



「全隊、合図があるまでその場で待機」

聳える石造りの城の手前の林で立ち止まる総勢50名余りの集団。

「ここって…」

「ああ、”ハートの女王の城”だ」

「へえ、知ってるんですか？しかし今あそこは”帝国軍”の拠点となっているので」

確かに、城門の前にいるのは、トランプの兵士ではなく、いつかの装甲服の兵士達。

「——合図です」

言って、悠綺姉が突撃の指示を出す。

新式であるコンパクトかつ印象的な外観のアサルトライフルを構え、兵士達が茂みから飛び出す。

「さ、私達は裏口に回りますよ」

「正面からでなく？」

「ええ。どうしても気になることがありました」

「……？」

「経路を占拠しているはずの大隊がいなかったでしょう？おそらく拠点まで撤退しているはずですよ。」

ですから、正面から行くのは陽動、我々は裏口から攻め込むのです」

そう言われれば、隊員が10人ばかり突撃せずに残っている。

「さ、こっちです」

「そこな兵士諸君！」

高らかに降り注ぐ声は、城の中腹あたりから聞こえて来た

「我こそは、ダリアス帝国空軍師団長、リーベリック・リエルトなるぞッ！！」

また声が降ってきた後、二つの人影が降ってきた。

「悪いがここから先は関係者以外立ち入り禁止だ」

金色の癖の強い短髪をした青年が言う。

どこか上級大尉という感じがするのは何故か。

「え、まさか…空軍がなんで陸に…」

「確実に哀れみの目で見られてますよ、將軍」

青年の横に控えた女性が愉快そうに言う。

「問題なしだ！私は特に空軍入隊を希望したわけでもないからな！」

「左様で」

チッ、とばかりに舌打ちする女性。

「丁度いい、ここで敵将の首を獲らせていただきます」

悠綺姉が、日本刀の柄に手を掛ける。

「ふむ…淑女に手をあげるのは私の矜持に反するが…」

「言ってる場合ですか准将」

「その通りですね」

会話を割り込む、というか斬り込む悠綺姉。

鋭い剣戟が二人に襲い掛かる。

「なるほど、そのロングブレードは伊達ではないか」

「ほら、応戦して下さいよ准将」

「ならば期待に応えるでしょうッ！」

青年が腕を一振りすると、突然その手に一本の剣が握られていた。
「来い！」

「うりゃあああああああああ！！！」

盛大な掛け声とともに、強烈な横槍が入れられた。

やけに長い日本刀での横合いの一撃を、青年は正面で受け流す。

「詩乃ちゃん！？！」

悠綺姉が構えたまま固まり、

「クッフッフフ…やりますねえ、これなら多少は楽しめそうですう」
妹の方は鎬を削りながら笑う。

「横槍が入るとは予想外だな…ローニア、そちらは任せた！」
「お任せ」

やる気のない声で答えるローニア。

「貴方が相手ですか？」

「らしいですね」

言って、手を腰の後ろに回し、長めのナイフを抜き放つ。

「うおお…これなんか作品違くないか…」

「おい、全員裏口に行ってしまったぞ」

「あれ、そういや冬弥も…」

いつの間にか皆いなくなっていた。

「私達も行くぞ」

「え、ああ…そうするか」

剣と日本刀、ナイフと日本刀という妙な組み合わせの戦いが始まる
最中、軽いノリで言い出すアリスと、軽いノリで応える和兔。

裏口は、すぐに見つかった。



第三話：シンコウ・2（後書き）

いかがでしたでしょうか。

まだまだ長引きそうですので、しばしお付き合いの程を。
朝宮脱兎でした。

第三話：シンコウ・3（前書き）

今回もなんとか一ヶ月以内の投稿です。

第三話：シンコウ・3

「さて、これからどうする？」

「そうだな——おい、そのの」

「ひい!？」

厨房の入り口から覗き見していたトランプ兵——全身鎧の上からコックタイやらコック帽やらを着けている——にアイアンクロウをかますアリス。

「少し訊きたいことがあるのだが」

「な、何でしょう!？」

アリスは、体格に似合わないほどの臂力りよりよくで兵士を頭上へ掲げる。

「謁見の間へはどう行くのだ？」

「真っ直ぐ行って大広間に出ましたら右手にあります階段を5階分上がりましてすぐ正面ですハイイ!!」

声が恐怖で引き攣っている。

「よし、行くぞ」

言って、空中でいきなりアイアンクロウを解く。

アリスはドシャリと尻餅をついた兵士の顔面に膝蹴りを加え、さっさと歩き出す。

「アクティブだな、お前…」

とりあえず兵士に手を合わせている自分にデジャヴを感じつつ、和兎もアリスの後を追う。



両開きの扉を蹴破るようにあけたアリスは、開口一番

「遊びに来てやったぞ臆病者!」

とのたまった。

「首を刎ねるぞ痴れ者が——しかし今はそれどころではない」
紅い部屋の紅い玉座に鎮座する紅い女王は、憂いのこもった溜息を漏らす。

「先刻リーベリックとか言う男が来てな、宣戦布告からものの半刻でこの城を攻め落としおったわ」

「リーベリック：ああ、あの上級大尉か」

今日のアイツは阿修羅すら凌駕しているのだろうか。

「それとな——この部屋も奴の兵で囲まれておる」

「は——」

ひとつの窓から一人ずつ飛び込んできたり、天井から急に振って来たり、玉座の奥にある隠し扉から飛び出してきたり。

軽火器で武装したスワット風の兵士達が、ざっと見30人以上。

「——よくここまで来たな、少年」

自分達が入ってきた扉からは、あのリーベリックが颯爽と歩いてきた。

「お前：あの二人はどうした？」

「うちは優秀な部下が多くて助かっているよ」

ずれているようで、暗に二人くらい余裕で的な事を言っているのだろうか。

「時に少年。私は君を”巡礼者”と見たが：どうなのかね、その点
は」

「だから何なんだよ、巡礼者って」

「何と、巡礼者を知らぬとは：ふむ、よく見れば君は東洋人のようだな。ならば知らぬも当然か：よろしい、教えてあげよう」

カツン、と軍靴を鳴らす。

「”巡礼者”とは、まさに”世界を巡る能力者”のことだよ」

「世界を：？」

「そうだとも。君はこの世界にその能力を以ってやってきた：つま

りは、君が巡礼者である何よりの証拠」

また、男の手に突然剣が現れる。

「ならばここで君を捕縛するのが道理……」

「いや、ちょい待ち……ってかアリスも構えんなよ!？」

完全に一撃目で沈めようとしている構えだった。

「こんなところで捕まりたくないだろう?」

「それもそうだけどさあ……」

「少年、自分の置かれた立場を忘れていないか?」

周囲から一斉に安全装置を解除する音がした。

「あ……」

無理だな、と思ったのに。

「うごあ……」

窓際にいた兵士の一人が、頭を撃ち抜かれる。

紅いステンドグラスの破片に混じって、紅い血が飛散する。

「何と!？」

リーベリックが大仰な声をあげる。

「窓の射線から離れろ!」

全員が窓のすぐ脇に移動する。

「遠距離からの狙撃か……しかしどこから……?」

割れた窓を慎重に覗く。

狙撃手の姿はどこにもは見当たらない。

しかし。

「ぐあ……」

壁越しの狙撃で、兵士の頭に大口径の穴が開く。

「赤外線センサーでもつけているのか!？」

部隊が焦燥に包まれる中、それを嘲笑うように、兵士達が次々に倒れていく。

◆ ◆ ◆
薄暗い仮設トーチカの中。

握り込んだグリップの本体は、1mを超えるバレルと、コンクリートブロックのような弾倉、かなり分厚くなった肩のクッションという、威圧的なフォルムの長距離狙撃用対戦車ライフル。

「――18」

銃身の右横についたレバーを引き起こし、空薬莖を排出する。

「――次弾装填」

排出口に新しい弾を込め、引き起こしたレバーを180°下に回転させる。

長距離望遠スコープに映るのは、赤と青と緑で彩色された世界。壁の向こう側に敵兵を視認する。

「――射出」

トリガーを引き絞り、数秒後には狙った敵兵が倒れる。

「――19」

雑兵を全て撃ち終え、スコープから目を離す。

ザンバラに切った赤毛の青年は、ゆっくりと息を吐く。

「――痺れたな」

肩から先が痙攣している右手を振るいながら、ライフルを壁に立て掛けた。

◆ ◆ ◆

「…形勢逆転だな、少年」

やや引き攣りながらも、余裕の笑みは崩さない。

「この勝負、しばし預けるとしよう」

言って、自らの身でステンドグラスを割り、飛び降りる。

「ちよ、待——！」

「さらばだ少年——！」

下を見やると、無傷のリーベリックが森の中へ消えていくところだった。



第三話：シンコウ・3（後書き）

いかがでしたでしょうか。

今回は前話よりは短くできそうです。
それではまた次回まで。

第三話：シンコウ・4（前書き）

待ってくださっていた皆様、大変長らくお待たせいたしました。
今回試験期間ということで一ヶ月余りのブランクとなってしまっ
た上に、少々短めの内容になっています。
そんなわけですが、お楽しみいただければ幸いです。

第三話…シンコウ・4

神谷静音は薄暗い石造りの廊下を歩いていた。

「メアリー？メアリーどこー？」

さっきまで一緒だったはずのメアリーが、いつの間にかいなくなっていた。

ふと、腐りかけた木製の扉の奥から、ガサガサと何かを漁る音が響く。

「だ…誰か居るんですか…？」

そっと、扉を少し開けて中を覗き込む。

そこに居たのは――

「…工藤先輩？」

「…神谷さん？」

よく見知った先輩だった。

「どうかしたんですか？」

「いや、ちょっと荷物に埋まっちゃってね。神谷さんは？」

「さっきまでメアリーと一緒にだったんですけど…はぐれました」

「あー…まずいね、それは」

とにかく辺りを探すことになり、二人は城内を歩き始めた。

「―――で」

なんでいきなり牢獄行きなのかと、和兔は声を大にして叫びたかった。

兵士が剣を抜いているからやらないけど。

「こじ開けるか？」

「もう好きにしてくれ…」

和兎と同じ部屋に入れられたアリスは、嬉々として牢の格子に手を掛ける。

「よっ——」

軽い掛け声で、人が通れる程の隙間を作る。

『貴様…!』

「邪魔だ」

裏拳を顔面に当てられ、トランプの兵隊は空中を回転しながら監視部屋の奥へと消えていった。

「お前、なんかコイツらに容赦ないよな…」

「そうか? ——まあ、恨みならあるかな」
薄っすら笑って、そう呟いた。

◆ ◆ ◆
「——あの、さ」

厨房で、綾瀬螢が調理道具に埋もれていた。

「何でもいいから助けなさいよ!？」

ジタバタと、なんとか這い出した細い両腕を振る。

「あ、はいはい」

山のように重なったフライパンやら鍋やらをどかしていくと、仰向けで倒れた螢が見えてきた。

「なんでこんなところに埋まってたんですか?」

「いきなりここに落ちて、この山のような器具が雪崩れ込んだできたのよ」

疲れた表情で言う。

「まったく、なんだってこんな所に——」

「——なんでこっちなんだよ?」

——私の勘はよく当たるんだ

なんて会話が、廊下の奥から響いてきた。

「今のは……」

「先輩と……アリスさんですかね？」

静音の予想通り、厨房の入り口からアリスがひょっこり顔を覗かせた。

「ほら、やっぱり居たぞ」

「マジかよ……それホントに勘か？」

「私に透視が出来るように見えるか？」

見えないけどさ……と不服そうに呟く和兔。

そこでふと何かに気付いたように、螢が口を開いた。

「ね、メアリは？皆一緒にじゃなかったの？」

「「あ……」」

見事に三人口を揃えて言った。

「最初是一緒だったんですけど……」

「そっちにもいないのかよ！？」

影の薄い奴は大変だ、などとアリスが考えていると。

「いやー迷った迷ったー。どうしようかなー」

どこか空々しい声がした。

「メアリの声……！」

「間違いなさそうだ」

言うが早いか、螢と和兔が走り出す。

「先輩待ってください——ひやあ！？」

転びそうになりながらも、静音もあとに続く。

「君は行かないの？」

「私は走らないタイプの性格らしいからな」

「あー、図書館でやってた性格占い？」

和兎と螢の押し問答の最中、アリスとメアリは二人して性格占いの本を広げていたのだった。

「負けず嫌いだなあ……」

「そうとも言われた」

……意外に性格判断も侮れないかもしれない。

冬弥はそんなことを思いながら、トコトコとブーツを鳴らすアリスの後を追った。



第三話：シンコウ・4（後書き）

いかがでしたでしょうか。

性格判断って結構当たるんですよね、血液型の説明書シリーズ読んどると。

統計的なものって当たりづらいはずですけど。

それではまた次回お会いしましょう。

第三話：シンコウ・5（前書き）

皆様一ヶ月ぶりです。

一ヶ月に一話って遅かったんですね…

自分にはこれが精一杯ですが、まだしばしお付き合いの程を。

第三話：シンコウ・5

窓も閉め切った野営テントの中で、一人の男が長椅子に座っていた。「フェイン、テューラー、ザックス、ソルス——」

その後も、幾人かの名前が挙げられる。

「すまない、皆……私のせいだ」

リーベリックは片手で目元を覆い、いまだに謁見の間に野晒しなっている部下達の名前を一人ずつ呼んで、静かに涙を流す。

「油断した……私のミスだ……」

信頼のおける部下を35名も死なせてしまった、と。

「准将閣下ー？ いるんですかー？」

テントの外から、間の抜けたような声が掛けられた。

「ニアか———今行く」

深く息を吸い込み、その分だけ一気に吐く。

天幕の入り口の垂れ幕を押しわけ、外に出る。

「閣下、本部から帰還要請がきています」

「帰還？ この状況で？」

そう言うリーベリックの瞳の奥に、ローニアは焼け付く様な何かを見た気がした。

「精鋭部隊の35名を失い、あまつさえ大隊すら押し返されそうなこの状況で？」

表面上は冷静なつもりなんだろうが、声は殺気に満ち、目の端は力の込めすぎでヒクついている。

「大隊の進撃を中断！ 本隊と合流したのち、再度敵軍の拠点を強襲する……！」

野営地に集まった数十人の隊員に高らかに宣言し、本隊のいる拠点へとバギーを走らせる。

「あーあ、突っ走っちゃったよあの人」

ローニアは溜息をついて、

「荷物まとめて。痕跡はなるべく消しておくよーに」

それだけ部下達に言っつて、ローニアも黒色の装甲車に乗り込んだ。



ランタンが机上を照らすテントで、三人の男女が思い思いに時間を潰していた。

赤毛の青年は黙々と、謎の襲撃による被害状況の報告書をノートパソコンでタイプしている。

スーツ姿の女性は、今しがた血糊と脂で汚してきた刀の手入れをしている。

「3人……」

不平を込めて自分の相手をした数を言う声が、意気消沈で机に突っ伏している着物姿の仮面の女性から漏れた。

突然逃げるように王城に駆け込んだあの二人組みの代わりに割り込んできた4人。

なかなか大したナイフ格闘を駆使してはいたが、結局はあっさりと斬り伏せてしまえる程度のもだった。

「あの空軍人は斬り甲斐があったでしょうねえ……」

至極残念そうに、詩乃がひとりごちる。

「ぼやくな。我々の任務は敵の足止め、それ以上は労働超過だ」

タイピングの手を止め、赤毛の青年——大隊指揮官アラサワオウシヨウの荒沢謳正は言い放つ。

「殺人狂でもあるまいし、斬った人数でどうこ「斬った人数で給料決まる環境を作った人が言いますかあ？」……ごもつとも」

戦場での戦果を向上させるには、士気を向上させることだと仕官学校で教授が大層な御高説のように語っていたのを思い出し、士気をあげるには何が必要か？などと考えた謳正によって提案されたのが、傭兵のように戦果によって給金が決まるという、自国で一度は廃止された制度。

これにより、僅かばかりは戦果も上がっている。

「少佐ああああ！！」

テントの外から、盛大な怒号のような伝令役の声が響いた。伝令は駆け込むやいなや、床に両手をついて肩で息をする。

「どうかしたのか？」

「ゼエ：北西の森よりハア：敵二個大隊の進撃を確認ゼエ：至急お伝えせねばと：」

息も絶え絶えな伝令に水の入った紙コップを押し付け、謳正はテントの外に駆ける。

謎の襲撃で3割以上を失った隊では、些か分が悪そうだが――

「全隊迎撃体勢！ 敵軍の主戦力を迎え撃つぞ！！」

おそらく3倍はあるだろう敵の戦力を、あえて迎え撃つという。

その戦力差を埋める策は、仕官学校時代の教授にいやというほど叩き込まれていたから。



装甲車の中で揺れを感じながら、ローニアが軽口を漏らす。

「功を焦りますか、准将？」

そんな軽口も、今のリーベリックには返す言葉がないらしい。

「そうだな、急がなければターゲットに逃げられる。あちらは撤収戦に長けているからな」

至極真面目な顔で、至極真面目に応えた。

「：カルシウム不足ですか？」

「最近乳製品を摂っていない」

「左様で……」

いつもならこのくらいでいつものようになるのだが、今回はそうもいかないらしい。

「死ぬ気ですか？」

「……仇を討つのに、命を捨てる必要はない」
軽く俯いて、そう呟いた。

「仲間の無念は、完全なる勝利で晴らす——！！！」

毎度のことと呆れながら、ローニアは苦笑する。

「付いて行きましよう、どこまでも」

そんな童謡の歌詞を思い出していた。



「む、今どこかで妙な雰囲気……」

超直感でも積んでるじゃなかろうかこの少女は。

「やっぱお前勘じゃなかったんだな？ ええオイ？」

「莫迦を言うな、今のも一種の勘だ」

メアリを見つけた後も未だに言い合っている二人を余所よそに、4人はあらぬ出来事を目の当たりにして驚いていた。

「やあ！ また会ったね」

気軽に挨拶をかます、三角帽を目深に被った、黒いローブ姿の男。

「何！？ また！？ またアンタ！？ 全然帰れてないんだけど！？」

調理器具に埋められたのをよほど恨んでいるのか、螢は男の胸倉を

掴んで揺らしまくっている。

「やれやれ、少しくらいは加減……かげ……ウツ……」

魔法使いの顔が青ざめてきた。

「綾瀬さん、そのくらいにしないと死んじゃうよ——ってまだ息してる？　してるよね？　ストップ！　思いとどまって綾瀬さん！？」

顔の上半分は意地でも見せないつもりのように帽子が固定されていたが、もう若干トリップ状態に入ってしまったている。口からはブツブツとうわごとが漏れ出す。

「あ、つい……」

なんとか螢を止めて、魔法使いを支える。

「ハッ……私は何を……確か花畑が見えたような……」
シヤレにならない。

「お前ってそういうポジションなのか？」

「いや、普段は違うんだがね？　あー、普段から酷い目には遭ってるか……」

伏目がちに自嘲していた。

「ともかく、帰し損ねたからにはキチンと帰ってもらわないと困るから、さっさと送ってあげよう」

文法がおかしい気がしたが、帰してくれるということで全員黙っていた。

「さて、例によって準備はこちらですから、彼についてくるといい」

言うが早いのか、魔法使いは空中に霧散した。

「アイツってホントに人間かなあ……」

「一般人じゃないのは確かだね」

冬弥は殺人の共犯にならなかったことに安堵していた。

「で、彼って？」

「さあ：あ、あの人かな？」

コツコツという靴音が、廊下の曲がり角の向こうから聞こえる。

「アロー、アロー。こちら分隊長こちら分隊長ー。てかこの無線通じてんのかな……」

ブラウンの髪を適当にセットした感じのその男は、至ってラフな格好をしていた。

街中を普通に歩いていそうな三十路手前、という容貌だ。

あちらも和兎達に気付いたのか、足を止め、耳に押し付けたヘッドフォンから伸びるマイクに向かって話す。

「あー：一応報告。高校生くらい5名と中学生くらい1名確保、オバー」

気のない声で伝えて、こちらに向き直る。

フォートン

「俺はギエン・F・ベルジュ。お前さん方の保護を頼まれた。黒い三角帽の男って言えば分かるよな？」

そんな奴一人しか知らない。

「城の裏手で待ってるよ。さっさと行こうぜ」

「お、おう……」

なしくずしに頷いて、皆も後に続いた。



「連れて来ましたよ……っと。これは失礼、隊長さん」

男が隊長と呼んだのは、男よりもいくつか年下であろう女性。

腕を組んで木に寄りかかり、イライラと指で二の腕を打ち、コツコツと靴底で地を打つ。

「遅い。ここまで何分掛かった？」

日に焼けた肌と黒い髪は、アラブ系ではなく白人系のものだろう。蒼い瞳がこちらを睨む。

「連絡を受けて40分は経ったぞ？　その間、お前はどこで何をしていた？」

「道に迷ってました」

シレッと悪びれずに言う。

しかしこれが本当だから嫌になる。

同じ道をグルグルグルグル回らされて、正直全員うんざりしていた。さっきも通ったと指摘しても、「いいのいいの、どーせ大した仕事でもないし」などと受け流す。

「…そうだな、減俸三ヶ月で許容しよう」

「ハア！？　ふざけ…あ、銃は勘弁…」

女はノーアクションでギエンの額に銃口を突きつけ、そのまま黙らせる。

「さて——お見苦しいところを。クライアントが奥でお待ちです」女は平坦な声で言って、林の奥を指す。

指した方向から、これまた普通の男が走ってきた。

「イレエヌ隊長、東の森で共栄国とダリアスの戦闘が始まりそうです。巻き込まれる前に撤退することを進言します」

「そうだな…ティンクに戻るように伝えてくれ。出来ればお急ぎ下さい、皆さん」

見事に命令口調と丁寧語を使い分けるその女性は、さくさくと林の裏手へと歩いていった。

「さって、と——アルト、俺はあのガキ探して来るから、コイツら頼んだ」

「任せてよ。皆さん、こっちへ」

男に先導されて、林の奥へ奥へと入っていく。



第三話：シンコウ・5（後書き）

また登場人物が増えます。

一応きちんと管理していきたいとは思いますが、どうぞ温かい目で見守ってやってください。

感想・アドバイスその他諸々お待ちしております。

第三話：シンコウ・6（前書き）

はい、今回は何とか一ヶ月以内に投稿です。
もつと調子よくいかないのは仕様なのでご了承下さい。
では、どうぞ。

第三話：シンコウ・6

「何故だ…何故押される…!?!」

ダリアスで現場指揮を務めてはや15年、カイゼル・マキシーンは、こんな状況を見たことがなかった。

撤退を開始した敵軍を追い詰めたと思ったら、狭い谷間に誘い込まれ、前と左右から集中砲火を浴びている。

敵の三倍以上あった戦力は、今や敵と同じほどしか残っていない。谷の上からの砲弾が、真横の地面を抉り取る。

爆風に吹き飛ばされながらも、カイゼルは叫ぶ。

「准将は…准将はまだか!?!」

「少佐、作戦は大成功ですね」

すぐそばに控えた通信兵が話しかけてくる。

「ああ」

そっけなく応えて、謳正は戦況を見守る。

教授が趣味で造ったシミュレータの中にあった戦況を思い出し、内心可笑しくて堪らない。

本隊が敵を谷間に誘い込み、上方に待機していた別働隊が集中砲火を浴びせる――

「今まさにあの”お遊び”通りに戦況が進み、今まさにあの”お遊び”通りの勝ち方をしようとしている。」

「…? 少佐、未確認の飛行物体がこちらに接近しています」

レーダーを覗き込んでいた方のオペレーターが、こちらに振り向きながら報告する。

「飛行物体――数はいくつ?」

「一つだけです。大きさから見て――おそらく輸送ヘリです」

輸送ヘリ？ この戦況で？

「……気を付けろ、嫌な予感がする」

謳正は僅かに眉間に皺を寄せて、再び黙り込んだ。

バラバラと、チヨッパ名前の由来になったプロペラの爆音が機内に響く。

「准将、まもなく投下ポイントです」

フェイスガードのついたヘルメットを被ったパイロットの声。

「了解した。ニア、許可は取れたか？」

「それが……まだ……」

「そうか。なら事後確認だ」

「ですがそれは……」

「全隊に通達、”即退避を命じる”とな」

「Yes, Sir.」

ローニアが止めようとするが、リーベリックは構わずヘリのスライドドアを開ける。

彼女は仕方なく、即返答を出したパイロットを睨みつける。

「”転送元座標、検索”」

ヘリの底面側に、直径5mほどの紫に光る円陣が10ほど、無秩序に展開される。

「”転送元座標、確定。転送先座標、確定”」

円陣に手を翳し、呟くように唱える。

「”転送対象、弾薬庫内の全砲弾・全弾頭”」

武器庫の中の正確な光景を思い浮かべ、そこから物を引きずり出すような感覚をイメージする。

「”爆撃——開始”」

複雑な紋様を描く円陣がまるで生き物のように宙を滑り、そこから砲弾や焼夷弾が落とされる。

次々に落ちるそれらは、容赦なく谷間を抉り取っていく。

響く爆音、飛び交う阿鼻叫喚の悲鳴。

撤退を始めた友軍のすぐ傍にも落ちているのだが、うまく避けていないようだ。

「――相変わらず派手ですね」

「始末書の量も派手なことになりそうだがな」

リーベリックは上司の顔を思い起こし、盛大に溜息を吐いた。

「戦車隊、全滅……第三、第七小隊も……」

オペレーターの声。

「魔導師か……」

忌々しげに呟く。

基本的に、彼は非科学が嫌いだ。

理屈では勝てないし、第一あの人種とは根本の部分が合わない。グツグツと心中で何かを煮えたぎらせながら、オペレーターと向かい合う。

「全軍撤退。本営は破棄、逃げ遅れても助けは来ないと伝えておけ」

「了解。少佐は先に帰還してください」

「そうさせてもらおう」

謳正は呻くように言って、ベースキャンプを後にした。



「さて。二度目で悪いが、この鏡で帰ってもらおう」

「またそれかよ……」

見覚えのあり過ぎる鏡の前に立っている魔法使いに溜息を漏らす。今度も帰れないかもしれない。

そんな思いに、6人は駆られる。

「安心してくれていい、今度はきちんと繋がっている」

自分で潜ったしな、と付け加え、魔法使いは鏡の後ろに手を回す。

「さ、どうぞ」

「その前に――」

言って、和兔は冬弥と静音に手を差し出す。

「今度ははぐれないようにさ」

意図がようやく伝わったか、二人は和兔の手を取り、残る三人も手を繋ぐ。

「……なんか保育園の遠足みたい」

螢は嘆息して、静音とメアリの手を握る。

「よっしゃ、行くぜえ!!」

走り出した和兔に引きずられるように、全員鏡に呑み込まれる。



「どわっ!？」

鏡の先で、思いつきり顔面から地面にダイブを決める。

「大丈夫ですか先輩!？」

静音が駆け寄る。

「鼻が…今度こそ絶対折れた……」

アリスに蹴られたときはなんとかあったが、今度はマジな気がする。

「鼻筋くらいしょっちゅう打ち込まれてるでしようが」

螢の冷たい一言を、和兔は睨みつけて黙殺する。

「だーかーらー」

耳に入る、聞きなれた声。

「図書館で騒ぐなっつってんでしようが!!」

スパーンとハリセン——何故持っているかは不明——で、速水薫は今度こそ全員の頭を叩いた。

「あーもう、次に騒いだら首根っこ掴んで放り出すからね」

ハリセンを肩に担ぐように持ち、司書の定位置に戻っていった。

「戻って……来れたのか……？」

「そのようだな——あのハリセン、何で出来ているんだ？」

アリスはそんなことを本気で訊いていたが。

「何にせよ、これで俺の言っていたことが事実だって——」

「ねえねえ、また連れてってよ！」

「……はい？」

螢は、それはもうキラキラした瞳で和兔を見ていた。

「ああいう場所なら実戦もできるし、何よりこっちで時間が経っていないみたいじゃない？」

壁掛けカレンダーのバツ印と柱時計を見て、螢はそう結論付けたらしい。

「しかもこんなお土産まで貰ったんだから、使わなきゃ損でしょ」
ババーンと掲げて見せたのは、切っ先から柄元まで真っ黒な竹刀。

「ま、まあ皆がいいって言うなら……」

和兔はチラリと他のメンバーを見やる。

「僕は構わないけど」

冬弥、お前だけは止めると思ったのに……

最後の砦と思っていた者が真っ先に陥落してしまった。

「私も良いよー」

メアリは——例によって、珍しければなんでも良いのだ。

「私は先輩と一緒に……」

ゴニョゴニョと最後の方を濁らせる静音。

先輩ってどいつだよと和兔は考えてみるが、答えは出そうにないのであっさり放棄する。

「決まりね。また行けるようになったらいつでも呼んで。すぐ行くから」

まあおそろくいつでも行けるわけだろうが、今は黙っておこう。

「じゃあ今日は解散！」

螢の一声で、今日の集合はお開きとなった。

はて、アリスはどこか行くあてが——？

「……なんでやねん」

なんてツコッミたくなるほど強引に、行くあてが見つかるまで、両親が海外出張モドキ中の——一応妹がいるのだが——和兎の家に住み込むことになった。

——了——

第三話：シンコウ・6（後書き）

いかがでしょうか？

派手な描写が不得意で仕方ないので、誰かアドバイスなどお願いします。

ご意見ご感想、お待ちしております。

ではまた次回。

いんたーみっしょん「岩塚市」(前書き)

どうも、朝宮です。

今回は日常っぽい非日常を描いてみました。

お楽しみ頂ければ幸いです。

それでは後ほどあとがきで。

いんたーみっしょん「砦塚市」

砦塚市———
サイヅカ

その歴史は古く、安土桃山だとか、室町末期だとか言われている。
この地名の由来———

戦国時代、ここには城と城下町があり。なんてことなく平穏な生活をしていたらしい。

しかし、時は戦国。別段強いわけでもなかったこの国は、隣国によって占領された。

その際、必死の抵抗虚しく砦は落とされ、1万人以上の兵や民が殺されたという。

あまりにも哀れだということで、その隣国の城主が塚を作った。

『砦』跡の『塚』で、『砦塚』。

この街は、謂わば墓の上に出来た街なのだ。

それ故か、よく怪奇な事件が起きる。

首の無い女が夜の街を駆け抜ける、深夜に紅い手が走行中のトラックのフロントガラスを埋め尽くす、河の畔で夜な夜な半透明の少女が屈み込んで泣いている———

そんなことが相次ぐので、この住人にまともな人間は少ない。

まともならすぐに隣の市やもっと遠くに移り住むから。

市の境界線から異質な雰囲気を感じ出すこの街と、数々の怪奇事件それらと何故か折り合いを付けながら、この街の住人は生活を続けている。

まあ、大半は奇人変人の類であるが。

「なるほど、屋根裏で物音がするわけですね？」

「ええ…先月から、決まって火曜日に……」

親指と人差し指で直角を作り、それを口元に添えるメアリ。

「——ミステリーですね」

「火曜限定でこの家に来る鼠じゃなければね」

と、醒めた口調で螢。

「意外に心霊現象だったりするかもよ？」

少しばかり楽しそうな冬弥。

「マジで勘弁：ホント勘弁だって……」

ガタガタと寒気と鳥肌で震えている和兔。

「なんだ、怖いのか？」

ははん、とばかりにアリス。

「殴れないものほど怖いものはないぞ……」

「む……確かに」

殴れないのに崇ってくるんだぞ？とか怪奇の類（主に幽霊）の恐ろしさについて震える声で熱弁している。

「さてさてケイ、いっちょドローンとその”黒竹刀”で解決しちゃって！」

「うん、って今から!？」

衝撃である。

あと転入して三ヶ月は経つのに今でもケイは英国発音だ。

「怪奇が私を呼ぶ……」さあ解決してみせろ”とこの身を呼び寄せるッ……」

「オブライエンって相つ変わらずスゲエテンションだよな……」

と、この場にいつもとは違うメンバー——まあ、こういう場では馴染みなのだが——が一人。

今期オカルト同好会の強制会長、加賀屋陽一カガヤ ヨウイチである。

そこそこのルックスの彼、先輩に無理矢理加入させられ、そのまま卒業していった先輩の代わりに同好会の会長を律儀に務めているのである。

弱視の割には眼鏡を掛けないで有名だ。

まあ、校外では掛けているが。

「つかさ、無理に付き合ってくんなくて良いぜ？元々廃止決まってるのに――」

「何を言ってるのかなヨウは」

メアリの癖、人の名前は二文字までしか言わない。
伸ばして三文字なら言うが、結局二文字分だ。

「こんな夏場にピッタリの部活、他にあるのかな！？」
いいや無いだろう！と何故か反語表現。

「さあ、屋根裏へ突撃イ！！」

校内でのおしとやかさは何処へやら、「金色の弾丸（鉄砲玉的な意味で）」は、どこからともなく脚立を持ち出した。

「うわ、蜘蛛の巣が…」

「なんかカビ臭くない？」

「静音は来なくて正解だな…」

静音はなんでも所用とかで、今日は同好会には来なかった。

「で、ここですか奥さん」

「ええ、丁度リビングの真上くらいで…」

特に何かあるわけでもない屋根裏。

「変わったものもないし…よし、今日はここで寝ずの番だね！」

「うん、ちょっと頭冷やしてくるか？なんなら今すぐ氷水でもいいぞ？」

陽一が若干キレながら、メアりに拳骨を見せ付ける。

「拳骨は物を冷やせないよ？」

バカだなヨウはー、H A H A H Aなんて今時アメリカ人でも言わないんじゃないかってくらい笑い声をあげる。

確かイギリス人だったはずだが…

「もう好きにしてくれ……」

陽一は投げやりに言って、メアリはもちろんこれでもかとかばかりに

承諾する。

「さあ、来い——！！！」

嬉々とした表情で、屋根裏の隅に陣取るのだった。

「——和兔、起きてる？」

「あー…タイヤキばっか食えねって…」

「なんでタイヤキ——じゃなくて、起きなさいって」

「うおッ！？——なんだ螢かよ、脅かしやがって」

「もうすぐあの人が言ってた時間よ」

現在時刻、火曜日AM 1…58。

謎の怪奇音まで、あと2分——

「ワクワク、ワクワク♪」

「メアリ、口で言うのはやめておこうか。不謹慎だから」

「トーヤ、これは”オカ同”始まって以来の初めての事例なんだよ？
もうちょっと楽しみなよ」

だから不謹慎だって。

言っても無駄と早々に判断した冬弥は、黙ってリビングの上の板材を眺めることにした。

「——来た…！」

メアリが小声で告げる。

見れば、板材がガタガタと揺れている。

「何も…いない…？」

和兔は顔を真っ青にして、ヨロヨロと尻餅をつく。

「いや、よく見ろ」

アリスが一点を指す。

竹刀を構えていた螢が、それを見てがっくりと肩を落とした。

「……、やっぱり鼠じゃないの」

重く盛大な溜息を吐き、鼠と思われる小さな黒い影に歩み寄る。

「あ、鼠じゃなくてイタチだ」

ヒヨイと何の躊躇いもなく背中をつまみあげ、しげしげと眺める螢。確かに、ヒヨロリと長い体は、イタチのそれだろう。

「あ——」

ジタバタと身を振り、螢の手から脱するイタチ。

屋根裏への入り口まで駆け寄り、一度立ち止まり、こちらを振り向く。

しかしそのまま素っ気無く下へ逃げてしまった。

「付いて来い、ってことか？」

「でもイタチでしょ？」

「毎週火曜日に決まった時間にだけ屋根裏を叩くね」

「工藤君、貴方楽しんでない？」

「別に？」

少しばかりむっとした表情の螢に、笑いを堪える冬弥。

「なあ、柊」

「どしたよ、加賀屋」

訊かれた陽一は、屋根裏の入り口を指差す。

「オブライエンが一人で行っちゃったぞ」

「「「………え？」」」

見回すと、確かにメアリはいない。

「急げば間に合うぞ、たぶん」
アリスの一声で、五人は階下へと向かう。
事件はたぶん解決なのでそのまま帰っても文句は言われないうだろう。



「あ、居た居た」

親切にもメアリが矢印付きの付箋を電柱に貼り付けてくれたおかげで、何とか追いつけた。

付箋は無論回収してきた。

「みんなー、こっちこっちー」

暢気に手を振るメアリと、その足元で”お座り”のような体勢で大仰な門の前に構えるイタチ。

「ここって——新宮寺古武術道場？」

「綾瀬さんの通ってる道場だね？」

「そうだけど——なんでイタチがここに？」

「さあ…」

「——誰じゃ、こんな時間に」

ギギギ、と重い音を響かせて、来客用の小さい門が開く。

「先生！？なんで門の前にいるって——」

「最近は防犯も便利になったからのう」

そういつてチョイチョイと門の軒下についた小型の防犯カメラを指差すのは、長い白髪を後ろで結い上げ、口周りに長い白髭を生やした、身長170ほどで、筋骨隆々の白い着流し姿の老人。

精悍な顔つきには、薄っすら優しい笑みが浮かんでいる。
シンクウジ ゲンリユウ

新宮寺厳龍、この道場の師範である。

「ほう、その鼯は――」

「知ってるんですか、先生？」

「旧い友人の飼っていた鼯じゃて。確か一昨年の冬に死んだとか――」

「「「「ええ!？」」「」」」

アリスを除く五人はイタチから飛び退く。

「…?何をそんなに怖がる？」

「だだだだってそいつ、ゆゆゆゆゆゆ――」

「ちゃんと足も付いているだろう?ケイに至っては素手で掴んだだろう」

「う…」

思い出して悪寒がしたか、螢の顔が青ざめる。

「しかしまあ、こうして主人との約束を果たしに来たんじゃのう…」

「約束？」

皆そのまま喋らないので、アリスが問う。

「一匹だけでワシの家まで書物を取りに来る予定じゃった」

「書物…それを果たせずにいたから、こうしてこの世に留まったと?」

「おそらくのう…そうじゃ、せつかくじゃから綾瀬。その書物を貰ってやってくれんか」

「え…私、ですか？」

師範の言葉で現実に戻された螢は、呆気に取られていた。

「なに、元よりあやつとて書物が必要だったわけではない」

「…はい？」

必要ないものをわざわざ取りに行かせたと?

「あまり甲斐甲斐しく育てるだけでは教育に悪かろうと、旅に出したかったようじゃのう」

「イタチの教育と言われましても……」

苦笑を浮かべる螢に、イタチは、キューイ?と首を傾げる。

その後すぐ、イタチが螢の足首辺りに擦り付いてきた。

「どうやら、綾瀬が気に入ったようじゃの」

「それはそれで嬉しいような有り難迷惑のような……」

触れたイタチは妙に冷たく、妙に温もりを感じるものだった。

「ほれ、件くだんの書物じゃ」

言って、先ほどもで手にはなかった書物を手渡してきた。

「っていつの間に！？——は訊くだけ無駄ですね」

いつもどこからともなく現れるこの師範に、毎回驚くのは徒労というものだった。

渡された紐閉じの古めかしい本を手に取り、螢は表紙の題字に目をやる。

「なになに——”紅桜見聞録”？」

紅い桜って何だろう——

全員の脳裏にそんな考えが過ぎる。

「ほれほれ、人の家の門前で立ち読みもなんじゃ、帰って読みなさい」

眠たげに欠伸をする嚴龍に追い払われ、和兎達は道場を後にした。



「うーわ、もう3時じゃん……」

左手首につけた中古のデジタル腕時計を確認すると、とつくに午前3時を過ぎていた。

「ただいまー…っ」と

「何をそんなに慎重になる？」

と訳が解らないという表情で訊くアリス。

「うちの妹はこういうことに煩いんだよ…」

出来る限り無音で玄関のドアを開け、出来る限り無音で階段を上がって二階の自室に向かう。

「よし、っと…んじゃ、何処で寝る？」

意外とこざっぱりした部屋——あるのはベッドとデスクと本棚くらいか——を見回し、アリスが一点を指す。

「あそこが良い」

そう言って指差したのは——

「……押入れ？」

襖式の押入れを指差し、ふむ、と漏らす。

「居候とは押入れで寝起きするものなのだろう？」

「なんか違う気が……まあいいか、ちょうど布団入ってるし」

人様に見られて困るような物が入っていない。

妹に即日処分されるに決まっているからそんな物最初から入らない。

「では、おやすみ」

「ああ、おやすみ」

挨拶もそこそこに、アリスは襖を閉めて早々に寝息を立て始めた。

「さって、俺も寝ますか……」

ゴロリとベッドに寝転がると、眠気が一気に襲い掛かってきた。



いんたーみっしょん「砦塚市」(後書き)

いかがでしたでしょうか？

とりあえず「いんたーみっしょん」系列の主人公はメアリーで行きたいと思っております。

怪奇の街に謎のイタチ、謎の書物。

伏線張るだけ張って逃げはしませんよ、たぶん。

それではまた次回お会いしましょう。

御意見御感想お待ちしております。

第四話 ニチジョウ・1 (前書き)

どうも、朝宮です。

今回も前回に引き続き日常っぽい非日常となっております。

ただし番外ではなく本編扱いです。

この回で少しだけ話を進めますので。

第四話 ニチジョウ・1

灼熱の陽光が差す登校路を、夏仕様の制服姿の三人組みが歩いていく。

「なーんーでー、夏休み五日目がいきなり登校日なんだよー…」
倦怠感という名の強力なオーラを滲み出させ、和兔がぼやく。

「だらけてサボらないようにだよ」

彼の横に並ぶ冬弥は、涼しげな顔で歩く。

「もうさあ、なんでアンタはそう後ろ向きなのよ？」

苦笑を浮かべながら、螢が和兔の前に回って後ろ歩きで顔を合わせる。

「こちとら生まれつきこんななんだよ」

と昔は可愛かったと両親に評判の和兔。

「工藤ー、定例会あるから遅れるなー」

止まる気ゼロな自転車が横を通過し、伝言を託していった。

「会長、坂道はブレーーーー」

ゴッシャアアアン

「――キした方が…遅かったか…」

ノンブレーキで坂道を駆け下っていった女生徒は、ちょうど下り坂の終わりに差し掛かったあたりで前につんのめって、一回転を決めて横滑りで止まる。

「危なかったあ…ま、これも日頃の行いの為せる業ね」

妙に格好のいい表情で微笑を浮かべるが、日頃の行いからすると今すぐ電柱のラジエーターが落下して後頭部直撃で死んでも文句の一言も言えない気がする。

キツイ三白眼の下には深く隈が刻まれ、風に煽られる長い髪は痛み
に痛んでいる。

それを差し引いてなお美人と思える女生徒は、秋風早学園でも一人
しかない。

———経理委員会会長・朝風明乃。あさかぜ あけの冬弥が書記を務める経理委員
会で暴君よろしく君臨なさっている同級生だ。

「会長、大丈夫ですか？」

「問題なしよ。さあ、遅刻課金が嫌なら走りなさい工藤」

ビシッと指を突きつけ、さっさと自転車で行ってしまった。

「何、まだ課金とかやってるのあの会長？」

「名目だけだよ。実質削るのは学園からの配給金だけ———」

「公金横領！」

「螢、それは会長に言うべきだろ」

なんてことを言いながら、トコトコと学園を目指す。



「起立。気をつけ。礼」

委員長の気のない号令に生徒達も気だるく応え、教師もそれを気に
する素振りも見せない。

「そんじゃ、今日も授業やってくぞー」

クシヤクシヤの髪の男性国語教師は、黒板にコツコツと文章を書い
ていく。

「長かった：長かったなあ：」
3時間程しか授業はないのだが、和兎は疲れから机に突っ伏してい
た。

流石に睡眠時間が足りなかったらしい。

「柊は相変わらずだな」

「ま、そこがらしいといえぼらしい」

そう言っ、和兎の前の席で椅子の背もたれの方を向いて座っている女子と、和兎の席の横で腕を組んでいる眼鏡男子が和兎を覗き込む。

岸^{きし}辺^へ海^{かい}里^りと加賀屋陽一だ。

「ほっとけ」

とだけ言っ、寝る体勢に入っ。

「柊、早く帰ないと妹ちゃんが心配するぞー？」

「アイツも如月で補習だっの」

ムクっと上体を起こし、海里を睨む。

「如月の補習も全員だっけ？」

「確かそうだったぞ」

和兎と同じく妹が如月学園に通っている陽一が答える。

「柊くん、ちょいちょい」

声のした教室の前側のスライドドアの方を見ると、保健委員会の会長——何故か秋風早の委員会の長は”委員長”ではなく”会長”と呼ばれている——である、二階堂裕美^{ゆみ}が手招きをしていた。

「何ですか、会長」

仕方なさ気に席を立ち、会長の前まで向かう和兎。

会長は身長が低いので、自然と見下ろし見上げられるように視線を合わせる。

「梓ちゃんに呼んで来て、って頼まれたから」

柔和な笑みを浮かべる会長。

これは断れないと悟る和兎。

「…風紀委員ですね、会長」

「お願いねー」

小さく手を振る会長を背に、和兔はとぼとぼと風紀委員会が占拠している教室を目指す。



『汝、この部屋に入るならば一切の希望を捨てよ』

サインペンでそう殴り書かれた安いコピー用紙を見て、和兔はげんなりする。

「またなんか変わってるし…」

この間は『叩け、さらば救わん』だったか。

コンコン、と白いスライドドアをノックし、声を掛ける。

「会長、失礼しますよー」

返答がないのを了承と受け取り、ドアを開ける。

「よく来たな、柊」

カーテンを閉めているせいかわ暗くなっている部屋の奥、重厚な木製のデスクの向こう側から、指を組んだ手を前に置き、黒い革張りのデスクチェアに腰掛けた女生徒が言った。

「目悪くなるぞ、梓」

「安心しろ、灯りを消したのはノックの後だ」

デスクに置かれたボタンがやたらと並んだ基盤の一箇所を押すと、部屋の灯りが一斉に点いた。

「あれ、お前髪染めた？」

「姉に倣ってな。」風紀委員は舐められたら御終い”だそうだ”

背中に掛かる程に伸びた髪を全て金色に変えた少女は、薄く微笑む。
はやみあずさ
速水梓、姉である速水薫と同じく風紀委員会で会長を務めている彼女は、たぶん螢よりも強い。

正面から当たっても強いだろうが、それが手段を選ばないと来ているので性質が悪い。

「で、何か用事か？」

「ああ。実は最近、また”アレ”が出没するらしくてな」

「”アレ”って：5年前に出たっていう？」

「そう——”首無し女”だ」

首無し女——7年前から5年前にかけて砦塚市に出没した、謎の怪奇。

名前の通り首が無く、しかし断面から血が流れているわけでもない。服は日によって変わり、一応季節によって統一されている。

砦塚の警察隊が躍起になって捕まえようと試みたが、結局捕まるどころか正体すら掴めなかった。

「5年前ではなかった、生徒への被害が出ている。これは風紀委員会として見過ごせる案件ではない」

「で、なんで俺が呼ばれたんだ？」

「お前を呼べば色々”オマケ”が付いてくるからな」

「オマケ？」

薄く口元を開いて笑：ったんだろう、きっと。

蛙を前にした蛇みたいだがそこは気にしない。

「綾瀬には勿論対応してもらうが……最近お前の所に来た、金髪娘がいるんだろう？それも素手で人を吹き飛ばしたとかいう」

（螢か！？螢から漏れたのか！？）

意外と口の軽かった幼馴染を恨みつつ、ガクツと首を落として肯定した。

「よしよし。私としてはもっと人員を回してやりたいが、現状は”やんちゃな”不良グループの相手で手一杯だ。人員は自分で集めてくれ」

「分かったよ……あ、お前の姉貴はどうよ？」

「おお、それは名案だな。姉にも少しは無給奉仕と言うものを学んでもらわないとな」

秋風早大図書館の司書は自給2500円だと聞いたことがある。

座ってるだけでそれだ、あの面倒臭がりの速水女史が食い付かないわけがない。

「たまには無償で街に貢献してもらおうとしよう」
フッフッフ：と何やら腹黒く嗤う梓。
だから姉より妹が怖いと言われるのではなからうか。



第四話 ニチジョウ・1（後書き）

いかがでしたでしょうか。

世間から外れた街にある中で更に街から浮いた学園、というものを
目指しています。

御意見御感想その他アドバイスなどなど、お待ちしております。
ではまた次回お会いしましょう。

第四話 ニチジョウ・2 (前書き)

どうも皆様、朝宮です。

今回は二週間ほどで書きあげました。

怪奇シリーズは日常編でどんどんやりたいなあと思っている次第です。

それではどうぞ。

第四話 ニチジョウ・2

現在時刻は午後6時前、夕日も殆ど沈みかけている。

そんな時間に、市のほぼ中央に位置する住宅街に何かの集団がいた。

「さーさーやって参りました！！夏場恒例大肝試し大会く！！」

ドンドンパフパフと自前のドラムとあの音の出る名称のよくわからない楽器を鳴らすメアリ。

「肝を試したいなら自分達だけでやんなさいよ」

薫は早くも文句を垂れる。

「まあまあ。たまにはいいじゃないですか、速水さん」

宥める冬弥と螢。

参加したのは和兔を筆頭に、アリス、螢、冬弥、メアリ、静音と、面白そうだと付いてきた陽一と海里、仕事終わりに拉致された薫の面々。

「今回の肝試しの課題はあゝ……」首無し女を捕まえる”！！”
ハイテンションなメアリが無理難題を押し付けてきた。

「えーと……まあ皆さん、気楽に行きましょう、気楽に。基本は2人から3人を1組とし、何かあった場合は即時連絡、危険と判断される場合は即時退却ということ」

説明不足にも程があるメア리를冬弥がフォローし、組み分けが行われた。

「私、先輩とがいいです！」

一番に挙手した静音。

「じゃあ神谷さんは和兔と。他は……だいたい決まってますね」

和兔と静音、螢と海里、冬弥とメアリと陽一、薫とアリスという具合に決まった。

「それでは——散開！！」

号令一発、それぞれの組は東西南北に分かれて、”首無し女”を捜し始めた。

―和兔・静音ペア―

街灯の薄明かりがアスファルトを照らす。

就寝に配慮しています、という市のお題目通り、街灯は50mごとに一本ずつしか配置されていない。

「暗いですね、先輩…」

「足元気を付けろよ、静音」

腕を静音にガツチリとホールドされているので、むしろ和兔の方が足元が危うい。

ガタツ

「ひゃう!?!」

背後の物音に小さく悲鳴をあげる静音。

「痛い、静音さん痛いです痛い痛い痛い」

驚いた拍子に力を込められた細腕に、和兔の肘は曲がらない方向まで曲げられかけた。

「静音よく見ろ、猫だ猫」

胸が当たっているとも肘関節がヤバイことになりそうとも言えず、とりあえず和兔は背後を見遣った。

どうやら物音は、猫がゴミバケツに跳び乗った音だったようだ。

安堵した静音と痛みから解放された和兔が同時にほっと息をついた。

――先が思いやられる…

和兔はただただそう思った。

―螢・海里ペア―

ひよいひよいと歩いていく海里の少し後ろを、螢が普段の歩調で付いて行く。

「岸边さん、よく暗い中それで歩けるわね…」

「うん？まあ、暗くてもよく見えるし」

少し鼻歌まで混じり始め、いよいよもってノリがホラーから逸脱してきた。

「ま、いざとなったら――」

自らの手に収まった細長い包みを見遣り、螢はそれを固く握り締めた。

―冬弥・メアリ・陽一トリオ―

「ここだけトリオなんだな、アレ…」

「どうかした、加賀屋？」

「え、いやアレ…すまん、何でもない」

虚空を見上げ何やら言い出した陽一に振り向いた冬弥は、疑問符を浮かべ、そのまま視線を前に戻した。

視線を戻した先には、スキップしながら鼻歌まで歌っているメアリがいる。

――駄目だ、僕がすっかりしないと……

冬弥は不安と義務感に苛まれていた。

―薫・アリスペア―

「どうなの、その辺は？」

「アイツは、まあそれなりにしっかりしているよ」

年下の幼馴染、というかほぼ弟のような男子の評価が気になるとい

うのは、姉ならば当然と語った薫に、アリスがやんわりと質問に答えていく。

「しかし部屋に一冊もないとは…本当に高校生思春期男子かねえ、あの子は」

質問の中ほどで答えたそれに、薫は頭をひねる。

妹が怖いからと言っていたのは秘匿しておこうと心に誓っていたアリスは、誓い通りに黙っていた。

おかげで”ボクネンジン”だのなんだの言われているが、意味がいまいち理解できないので否定しないでおいた。

「おい、カオル…アレは……」

アリスが、電柱の影を指差す。

カオルもそちらを見遣る。

そこには――――

「首無し!?!」

「そのようだな」

電柱の影からこっそりこちらを覗いているのは、黒で塗りつぶされた切断面をしている頭の無い首。

中学生くらいの身長のに、花柄のワンピースを纏っている姿はまさにシュールレアリスム。

「あ、逃げた!?!」

こちらが自身に気付いたと感じたか、首無しの少女は一目散にアリス達の反対方向に全力で走り出した。

「和坊! カズボウ 首無しがそっちに走っていった!――もうそっちに来た!?!」

携帯に向かって叫んでいる薫を後目に、アリスは首無し女を追いかけていった。



第四話 ニチジョウ・2 (後書き)

いかがでしたでしょうか。

あと一章ほどで今話は終わりそうです。

御意見御感想等ございましたらどんどんください。
それではまた次回。

第四話 ニチジョウ・3 (前書き)

どうも皆様、朝宮です。

ずいぶん間が空いてしまいましたが、どうにか更新です。
これからいよいよ一話冒頭に書いた二次創作に移ります。
できればどうか、温かい目で見守ってやってください。
それでは、どうぞ。

※6／22修正

第四話 ニチジョウ・3

「来てる来てる！？いやむしろ追ってくる！？」

真っ黒な断面をした首の女が、和兎達を追いかける。

真っ黒な装いをしたその異形は、脚を緩めることなく和兎達に迫る。

「速い！何かとにかく速い！ジョンソンより速いんじゃないの！？」

通話状態の携帯を持ったまま走る和兎と、だいぶ限界に近い表情をしている静音。

顔は赤くなるのを通り越して青くなっていた。

「——悪い、ちょっと我慢な」

「へ…ってええ！？」

通話を切った携帯をポケットに捻じ込み、和兎は静音を後ろから掬い上げる。

「お姫様抱っこ」な状態で黒い服の首無し女から逃げる和兎と静音。とことんシュールな構図だった。



——速い、か…？

花柄ワンピースの首無し女は、とことこノロマだった。

50mおきにスツ転ぶし、よく見れば躓いているのは自分の足だし。

「なんなんだ、こいつは…」

アリスの口から、そんな呟きが漏れていた。

と、その前方から何かが走ってくる。

「——また首無しイイ！？」

静音を抱えた和兎だった。

そしてその後ろには、黒い軍用戦闘服を着た首無し女——体型的には女だと判断される——がぴったりと張り付いていた。

「って、アリス!？」

擦れ違い様に和兎は急停止し、アリスを首無し女との間に置く。

「——悦んでないか、シズネ」

「え、いやあ……そんなことありませんよ?」

どうも顔が緩み切っているのだが……アリスは疑問符を浮かべるが、そんな間に首無し女は、足を止めてアリスと対峙する。

「……被害者が出たというのは、コイツの方か?」

「そこなんだよなあ……ちよつと確認してみる」

和兎はそう言って、先程ポケットに捻じ込んだ携帯を取り出してボタンを数回押した。

「——……あ、梓か? 被害者が言ってた首無しってのは黒い奴か? ……あんがとな」

最後にそれだけ告げて、電話を切る。

「どっちだ、カズト?」

アリスは黒い首無し女を睨んだまま訊いた。

「ああ————黒じゃない」

「な……?」

黒じゃないのなら。

今、和兎の後ろにいるのは、どっちだ?

振り返ると、和兎の背後で、ワンピースを着た首無し女が手を振り上げていて……

「危な————」

言うより速く、アリスの視界の横端を黒い影が駆け抜けた。

その影は躊躇いなくワンピースの首無し女を引き摺り倒すと、マウントポジションで容赦なく胸部へと拳を叩き込む。

ワンピースの首無し女は、それっきりまるで動かなくなった。

「え……え、何この状況?」

和兎は訳が分からんという顔で立ち尽くしていた。

「助けてくれた、ねえ…」

そう言うのは、走って合流した螢、冬弥、メアリ。ついでに海里と加賀屋も合流済みだ。

「首無し…セルティですねよく分かります」

おおよそ体格が合っていないので違うだろうなあ、なんて思ってもメアリーは口に出す。

「うわ…前回に引き続きマジの怪奇現象だよ…」

加賀屋は目を白黒させているし、海里に至っては、何か楽しそうに首無しの二人を交互に見ている。

「なあ、そもそも言葉は通じるのか…?」

和兎が尤もな、それにしては随分と今更な疑問を投げた。

首から上がない、という時点で生命活動すら出来ないはずなので、思考とか聴力なんてものがあるようには思えないが……

何故か、首無し女は右手でOKサインなんか出していて…

「聞こえてんのか!？」

今度は頷くように——自然な動きで腰を折って——応える。

「ちなみに——何か探し物かな!？」

目は爛々意気は揚々なメアリが訊く。

と首無し女は砂っぽい地面に指をあて、妙に角ばった文字を書き出した。

『私は巡礼者を探しています』

「巡礼者…」

思い出される、その呼び名。

——誰が？巡礼者？なんぞに…

——？巡礼者？とは、まさに？世界を巡る能力者？のことだよ

「何だその、巡礼者ってのは？」

加賀屋が和兔に訊いてきた。

「あ、いやあ…なんだろうな？」

『今まさに見つけましたので』

そう書いて、和兔を指差す。

「え…お、おい…？」

『少し失礼を』

それだけ言^{書い}って、女は懷から素性の分からない物体を取り出した。

見た目は、手の平より少し大きな円盤状の小型地雷といった風体。

円面の殆どを埋めるような赤いボタンがそれらしく見える。

ボタンが手の外側にくるようにそれを持ち、持った手を引く。

「いや、待て、おい——」

明らかにその手は、和兔を狙^いっていて…

「待て待て待て待て！？」

小型地雷（仮）が和兔に叩き付けられると、辺り一面が光に包まれて——

◆ ◆ ◆
「——だああ！？」

一瞬遅れた怒声とともに和兔は、余りにも見知っていて、それでいて絶対に来ることの出来ない場所に立っていた。

「…いや、これは待て。ホントに待ってって」

これはあまりにもアレ過ぎる。何がアレって、何もかもがアレだ。

「どこだ、ここは？」

そんなアリスの質問が耳に入るが、もはや返答する余裕すらなかった。

埃っぽい室内。

足の短い机を挟むようにして置かれた二脚のソファーと、その横に鎮座するデスク。

『糖分』と書かれた紙の納められた額縁。

妙に安っぽい造りのその部屋は。

「嘘オオオオ!？」

『万事屋』と呼ばれているそこにそっくりで。

――了――

第四話 ニチジョウ・3 (後書き)

はい、今回も僅かばかりにネタを盛り込みつつ、次回へ持ち越しで
ございます。

それでは、次回でもお会いできることを祈りつつ。

第五訓 舟に乗るなら救命胴衣は着けましょう（前書き）

えー、皆様お久しぶりでございますね、朝宮です。
今回から二次作品化していきます。

が、出来の方はあまり期待に添えないと思います…
暇つぶしにでも読んでやってください。

それではどうぞ。

第五訓 舟に乗るなら救命胴衣は着けましょう

「おい、柊……状況の説明を頼む」

「あー、加賀屋、これはだな。なんというか……」

悩んだ。悩みぬいた。おおよそ5秒は絶対悩んだ自信があった。そして出た答えは――

「そう！ コレは夢だ！！」

……我ながらこれはないんじゃないか？

ダラダラと嫌な汗が和兎の頬とか背中とかをつたう。

「――そうか、コレ夢か……なるほどなあ……」

予想外な反応に拍子抜けした。

加賀屋陽一は意外と単純に生きていた。

「夢だってんなら、この状況も納得だな」

加賀屋が和兎の背後を指差す。

そこには、死んだ魚のような目をした男が立っていて。

「あー、客か？」

外から帰ってきたであろうその男はかなり汗だくで。

「今から仕事だから明日にしてくんねえか？」

なんて至極ダルそうに言ってきて。

「うあ……やっぱりマジで……？」

もはや間違いなく、ここはあの『銀魂』のあの舞台だったわけで。



「で、ここって何処よ？」

と、若干不機嫌な螢。

「川原、かな？」

冷静に応える冬弥。

目の前を流れる川は穏やかで、夏の日差しがかなり眩しい。

「え、なに、何？ 何がどうなってんの？」

流石にいつものように楽観できないのか、海里は柄にもなくうろたえている。

「えーっとね、うん。そう、これはね——」

告げにくいことのように、螢は深く息を吸って、静かに、呟くように言う。

「——夢よ」

なんて。

「……適当にも程がないかな綾瀬さん？」

「それ以外にどう言うのよ工藤君？」

ボソボソと耳打ちする二人を他所に、海里だけは納得したような顔をしていた。

「夢かー。そうだよね、夢だよねこりゃ」

岸边海里もおおよそ単純に生きていた。

「夢ならあれも納得だよねー」

「「はい——」？」

振り返った二人の目には、買い物帰りであろう袴姿のメガネの少年と、チャイナ姿の少女が土手を歩いている姿が映った。



夏の浜辺、熱い砂、照り付ける太陽、青い海、若干散乱するゴミ――

そんな絶好の海水浴場に、人は僅かにしか見えない。

その僅かも、これから泳ごうと集まったものでは決してなかった。

彼らはこれから――

「は？ えいりあん退治？ え？ ホントに来たの？」

……『海の家 ビーチの侍』とぞんざいに書かれた看板を掲げた出店の屋台で焼きそばを焼いているサングラスとリーゼントにアロハシャツという胡散臭い男は、やってきた彼らにそうのたまった。出店の前に並んでいるのは、十人と一匹の一団。

浴衣に麦藁帽子、腰に『洞爺湖』と銘の入った木刀を差している坂田銀時。

袖なしのチャイナ服にほっかむり、サングラスに日傘^{からかさ}装備の神楽。人生に疲れ切ったようなグラサンに啞え煙草の長谷川泰三。

唯一海を満喫すべく浮き輪装備の志村新八。

赤い首輪が目立つ白い巨大犬の定春。

そこに和兎、冬弥、螢、アリス、更に海里と陽一を加えた十人と一匹。

「……ちよつと、なんでこんなことになってんのよ？」

ぼそりと和兎に耳打ちする螢。

「それはエイリアン退治のことか？ それとも現状が銀魂なことか？」

冷や汗混じりに返す和兎。

「あーそォ、アッハッハッハッ。いやゝ助かるよゝ。」

夏場はかき入れ時だったのにさア、あの化物のせいで全然客入らなくてまいったのよゝ」

そうこうしているうちにも、話はどんどん進んでいく。

「あのゝ、ひょつとして……えいりあんに懸賞金かけたのって……」
やや不安そうにそう訊く長谷川。

「あゝ、おじさんだよ。おじさん」

空気が一気に冷め切ったような気がした。

「いや〜でもホント、来てくれるとは思わなかったよ。」

おじさんもさ〜、酒の席でふざけ半分で発言したことだけにまさかホントに来てくれるとは……」

瞬間、銀時は男の頭を鷲掴み、焼けた鉄板に押し付けた。

「ぎゃああああああああああああああああ!!」

焼きそばが緩衝材になってなんとか火傷はしなかったらしい。

「酒の席でふざけ半分? おじさん、こっちは生活かかってるから真剣なんだよ。」

男は冗談いう時も命懸け、自分の言葉に責任もってもらおう」

「待ってエエエ!! おちついてエ!! 大丈夫! 金ならちゃんと払うから! ちゃんと用意してるから!!」

必死に頭を持ち上げようとする男を、尚も押さえつける銀時。

「結構過激ね……」

「まあ……ギャグ、だし……?」

些かの不安を煽られつつ、和兎はどうしてこうなったか思い出していた。



「仕事って具体的に何を……?」

とりあえずここが『銀魂』通りの世界なら、だいたいいつ頃なのかが分かるだろう。

「あー、化物退治に海までな。——あ、言っとくけど付いて来たって懸賞金はやらないからな」

釘を刺すように言って、銀時は出発の準備にかかる。

「——ってことは随分前だな……」

巻数にして五巻辺りだろうか。

ちょうどそんな時、玄関の引き戸が開けられる音がした。

「ただいま戻りましたー…って、何してるんですか、銀さん？」

入ってきた眼鏡の少年とチャイナ服の少女に続くのは――

ヒョロリと背の高い眼鏡君と眼光鋭い風紀委員の少女と、ボーイッシュなハニカミ少女だった。

「冬弥に螢に…岸边まで!？」

「やっほー」

なんて言って手を振ってくる海里。

「そっちは加賀屋くん居るんだ…」

げんなりした様子の螢。

「――またシズネ達とははぐれたままか」

と、静かにアリスが言う。

「あー、それはまたまずい……」

危ない目に遭うには十分すぎる状況で、かなり不安になってきた。

「うっし、行くぞ」

と、準備を終えたらしい銀時が玄関に向かう。

「って、何処に行くって言うんですか一体？」

不満気な表情で新八が訊いた。

「――化物退治だ!」

無駄に好い表情で、白髪の侍は宣言した。



人手が欲しいという理由で無理矢理駆り出された6人。

6人と銀時、長谷川、新八は、何故か「ビーチの侍」と胸元にデカデカと筆で書かれたTシャツを着ていた。

『金は無いがそれ相応の品は出す』と豪語したおっさんが出店のカウンタ―下から出してきたのは、各種サイズのこのTシャツだった。
「……素敵なシャツですね……皆さん」

「そーだな思春期に母ちゃんがもし着てたらドメスティックバイオレンスの引き金になりそーだな」

「こんなの買ってこられたら親と縁切るね、俺は」
「てかなんでこんなの着てるんだろう私……」

長谷川と海里と陽一を除く全員がげんなりとした表情をしている。

「そのシャツはねえ！　ウチの店員しか着ることが許されない非売品のレアモノだよ！

これで君達も海の男の仲間入りだ！　だから俺を解放しろ！　海の男はこんなことしないぞオオオ！！」

と、砂浜から20mほど沖合いで十字架礫に掛けられているおっさんが喚く。

だからと言って誰が反応するでもない。

むしろ放っておいたほうが目的にはあっている。

「なかなか掛からねーな……えいりあん」

なんと、人間一人を餌にエイリアンを誘き出そうというのだ。

「銀さん、あの……言いづらいんですけど……全てをこのえいりあん狩りに賭けてたんで、帰りの交通費が……」

ちなみに和兎達は自腹を切らされた。

通貨が同じで助かったと内々で胸を撫で下ろしたのは少し前のこと。

「どうでしょ？」

不安そうにそう問う新八。

「やるしかねーだろ」

と、唐突に長谷川は言った。

「やるって、何を？」

と訝しそうに銀時。

「誰もいない海に——一匹の化物と、群れを成したビーチの侍。

——俺達が護らずに、誰がこの海を護るってんだ？」
そう言い放つ長谷川。

煤けたオーラが僅かに影を潜めている。

「お前らはなにか落ち込んだ時、どうやって気を静める？」

人間ってのはその立ち直り方で二種類に大別できるんだ」

紫煙を燻らせ、そうのたまう長谷川。

「一つ目は、自分より卑小なもんを見て『俺アまだマシだ』となぐさめる奴。

二つ目は、自分より大きなもんを見てチンケな自分ごとどこかへスッ飛ばしちまう奴」

言って、海の彼方に視線を向ける。

「俺ア二つ目だ。昔から嫌やな事があるとよく海に来た。己の小ささを知る為にな。ちなみに妻ハッと出会ったのも海だ。

わかるか？ 海は俺の教科書であり、先生であるんだ。

人は誰でも心に拠りどころというものをもってるもんさ。たとえば職を転々としよーが、俺の心はいつもここにある」

ゆっくりと立ち上がり、海へと近付く。

「そして仕事ってのは、そういった自分の居場所を護る手段だと思ってる。

金云々じゃねエ、こいつは俺の天職だ。わかるか？ この気持……」

言い掛けて、視界に入ってくる海をプカプカと浮かぶモノ。

浮き輪に腰掛けている銀時と、ザバザバと気持ち良さそうに泳いでいる新八だった。

「……お嬢ちゃんわかるか、俺の気持ち」

「いいな、みんな泳げて」

「……そーだね」

グラサンの隙間から若干水気が覗いた気がした。

「うわぁ…そういえばこんな扱いだっけあの人……」
「オッサンだって頑張って生きてるんだろうに……」
遠巻きに、螢と和兔が人の無情感をしみじみと感じていた。

「ああ、そーか……お嬢ちゃんは日の光に弱いから海水浴もできねーのか」

一見普通の地球人らしい神楽は、三大傭兵種族の一角である「夜兎」で、見た目に似合わない怪力を備える反面、色素が薄く日中は日傘を差さなければいけない繊細な身体構造を持っている。
ほっかむりと丸サングラスもその為の装備だ。

「でも止めといた方がいいだろう。？えいりあん？が出るかもしれんってのに、大丈夫かあいつら？」

危機感を全く感じずに遊泳に徹している銀時と新八。

「まっ、いいか。人の話もきかん奴は死んじまえばいいんだ」
そう言った長谷川の背後で声があがる。

「止めて止めて止めて！ 誰かその子止めてええええ！！」

「無理言うなって言うかそれならお前が止めろおおお！！」
さっき会ったばかりの少年少女達が騒いでいた。

「ったく、こっちなんだって……」

目の前にいるのは神楽。その上にあるのは直径3mばかりの大岩。

「いいな～みんな泳げて」

さっきと同じ台詞を言いながら、ズシズシと重い足取りで水際へ近付く神楽。

「お嬢ちゃん？ ちょっと何するつもりなの？ どこで見つけてきたのそれ……ちょっと」

「他人の幸せを見る位ならいっそ壊してしまった方がマシよ」

「みんなアア逃げてエエエ！ 病気だ！ この娘病気……ん！？」

銀時達に叫ぼうと沖を向いた瞬間、それは見えた。

礫にされた海の家のおっさんの向こう側に、2mはあろうかという巨大な背鰭が。

「やべエ、ダブルパンチだ!!」

「あわわわわ……アリス! とりあえず神楽だけでも止めてくれ!!」

「まかせろ」

とーん、と一足跳びで神楽まで接近するアリス。

ガシッ、と大岩を両手で掴み、投げのモーションを邪魔する。

「? なんだア?」

「何か浜の方が騒がしいですね」

暢気に浜の方を見遣る二人に、長谷川は更に叫ぶ。

「後ろオォ!! 志村後ろオォォ!!」

「なにを?」

銀時が振り返ろうとしたそのとき、海の家のおっさんの悲鳴があがった。

すぐそこまで、大ジャンプを決めた、十字架を啜えた巨大な魚というか異形の怪物が迫っていた。

「「「ぎゃあああああああああ!!」」」

おっさんと銀時達の声が重なった。

「出たア! マジで出た! マジで出たよオイ!」

「うわアアア!!」

全速力で岸を目指す銀時と新八。

「あわばばばばば! 全然スピード出ねエ!」

焦る銀時。

それもそのはず、浮き輪をつけたままバタ足をしたところでスピードが出るわけがない。

そんな間にも、新八はクロールでガンガン進んでいく。

「待て新八テメエ！ 何スイスイ泳いでんの！ お前らしくない！
なんとか追いつがる銀時は、不意に新八の水中眼鏡のゴム部分を後
ろから引っ張る。

「お前は何やってもダメ、ツツコミ以外何も出来ねーキャラのはず
だ！ そーだろ！！」
なんとも酷い認識だった。

「いだだだだ！？」 眼エ飛び出すって！ 眼エ飛び出すって！！」
水中眼鏡に圧迫され、眼球がグイグイ前へ押し出される。
そんなやりとりの最中でも、怪物は容赦なく距離を詰めてくる。

「てめーらアアア！！」

背後から響く怒声。

「さつきはよくもやってくれたな！ 海の男の恐ろしさを思い知ら
せてやる！！」
何故か真正面を向くように啜えられた十字架に磔られたおっさんが
叫んでいた。

「うおおお来たアア！！ なんか合体してるぞ！！」
まるで意思疎通がとれているような連携のおっさんと怪物だった。

「やばい、あれはヤバイって！ どの辺が海の男の恐ろしさなのか
よく分からないけど！」

「よく分からないのは置いておくとして——アリスさん。それ、
投げちゃって」

律儀にさん付けで呼ぶ冬弥に応じて、アリスはその膂力で神楽から
大岩を奪い取った。

「え…ちよつと……」

と、岩の上から長谷川の声。

確か投げるのを止めようと岩にしがみついていたような……

「お嬢ちゃんちよつと待っておじちゃん乗ってるから！ これを投

「げつけるのは俺も賛成だがおじちゃん乗って――」

「はあ
ああ
あッ
！！！」

「ぎゃああああああ！」

力強い怒号と哀れな悲鳴が同時に響いた。

「あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ
あ」

銀時と新八の目の前に、叫ぶ岩が飛んできた。

無論叫んでいるのは長谷川だが。

「あれ？」

「オイこれ……」

ド
パ
ア
ア
ア
ア
ン

派手な音と共に、怪物諸共4人は海中に没した。

「あ」

「いま気付いたの!？」

長谷川がいなくなった理由を今やっと理解した様子のアリスだった。

ザバ、と一番に水面に顔を出したのは長谷川だった。

さっきの衝撃でグラサンはどこかへ飛んでしまったらしい。

「オイ！ みんな無事か！？」

「居た、一人浮いてきた！」

海岸に泊めてあつたボロボロの舟の上で、和兔と冬弥が浮き輪を持って右往左往していた。

「坊主、あいづらは！」

「それがまだ見つか、ら——!?」

驚愕に目を見開く和兔。

その視線の先には、こちらを見詰めるあの怪物がいた。

「あわわわわわ……」

「お、落ち着こう和兔。立ち上がって震えると僕まで落ちる——！」
戦々恐々となる船上と違って、長谷川は怪物に向かって笑みを浮かべていた。

まるで悟ったような、諦観に満ちた笑みを。

「——食いたきゃ食えよ。てめーの胃袋に入って海をまわるのも悪くねー」

「いやだー！ 死にたくないー！」

「暴れるなア！？ そもそもこれそういう話じゃなかっただろう！？」

船上で暴れる和兔と必死で舟の縁にしがみつく冬弥。

その横で、長谷川は怪物の背を見て驚いた。

怪物は、銀時と新八の二人を背に乘せていた。

「お前——」

長谷川が何か言いかけたが、舟が派手に転覆した音で掻き消されてしまった。

「————はー、実は心優しい怪物だったわけか」

なんとか生きて帰ってきた一行の話を聴いてそう呟いた加賀屋。

「和兔のおかげで服ごと海でゆっくりできたよ」

「工藤君、笑顔で青筋立るとホントに怖いんだけど……」

「だからマジで悪かったって！」

目が笑っていない冬弥に顔を真っ青にさせる和兔。

「……そういえばまったく泳いでいなかったような……」

ソファで『大人気！！ 怪獣と遊ぶ海水浴場！？』と一面に出ている新聞を読みながら、アリスがふと呟いた。

—
了
—

第五訓 舟に乗るなら救命胴衣は着けましょう（後書き）

いかがでしたでしょうか。

相変わらずオチが弱すぎですねはい。

次回はもっともマシにしたいものです：

それでは皆様、また次回。

第六訓 恥ずかしがらずに手を挙げて言え・1（前書き）

どうも皆様、朝宮です。

試験やら風邪やらで三ヶ月空けてしましまして……

しかも中途半端な文章量ですいません。

第六訓 恥ずかしがらずに手を挙げて言え・1

「はー…なーんで俺達、こんなところでコンビニのバイトしてんだっけ？」

「うだうだ言う前にさっさとモップ掛けしなさいよ」

赤い作務衣風の制服を着た和兎と螢は、『コンビニの麺類』と看板を掲げた大江戸マートにいた。

業務員入り口近くのモップ掛けをしている二人の、店の丁度反対側のレジでは、何やら破裂音が響いていた。

「工藤君たちなんてスナックでバイトよ？ 少しはマシな職場に当たったことに感謝しなさいよ」

「あー、うん。あの場末のスナックは嫌だよな……」

鄙びた店主と萌え要素ゼロ以下の猫耳団地妻しかいないスナックは、まあ、居候先の階下にあるわけだが。

「ん…？ ————おい、アレって……」

ふと、和兎は視線を上げた。

その先には、何やら不審な動きをしているツツパリが一人——

「ちよっとそこの貴方。一体何をしてるのかしら？」

言うや否や、螢は金髪リーゼントのツツパリの腕をこれでもかと言わんばかりの握力で捕らえた。

ちなみに。彼女の最高握力は70kgを超えるとか。

「さっさと懷に仕舞った商品出しなさい」

「んだよ、何も盗ってねえっての！！」

数十秒の押し問答の後、レジの方から新八がやってきた。

「何の騒ぎですか綾瀬さ———」

ツツパリの顔を見て、新八は驚いたような表情をした。
そちらに振り向いたツツパリもまた同様に表情を変える。

「……新ちゃん？」

「タカチン……？」



事務室にツツパリを引き摺り込んでいった螢の後に、レジ番の神楽以外が続く。

「高屋八兵衛、十六歳——新八と同じ年か。いい年して恥ずかしくねーのか？ 母ちゃん泣くよ、お前？」

面倒そうな声で銀時は続ける。

「大体オメー、こんなにたくさんさんの整髪料どうするつもりだったんだ？」

心配しないでもキマってるよお前、自分に自信をもて！」

「コレ全部俺が使うわけねーだろうが！！」

十数本も並べられた整髪料は、流石に一人分にしては多すぎる。

「じゃあなんだ、ご飯か？ ご飯にかけてサラサラいくつもりだったのか？」

「絶対に体壊すわよ」

「それもねえよ！！」

螢のそのツツコミは、あろうことか高屋に向かって放たれていた。

「……タカチン、なんでこんなこと」

なんとか平静を取り戻した空気の中、新八が口を開く。

「タカチン、こんなことする奴じゃなかったじゃないか」

「うっせーよ、あれから何年経ったと思ってるんだ？ もう俺はお前の知ってるタカチンじゃねーんだよ！」

高屋はそっぽを向いて、口調も荒くそう言い放つ。

「もういいから、奉行所でもどこでもつれてけや！ はりつけ獄門

上等だコノヤロー!!」

◆ ◆ ◆
僅かな黙考のあと、高屋はお咎めなしということになった。

「――恩でも売ったつもりか、テメー。また来てやってやっかな」

「その時は、僕が止めるよ」

真正面から、新八はそう言った。

「ケッ、相変わらずのお人好しだな新ちゃんよオ。」

寺子屋一緒に通ってた頃も、俺がピーピー泣いてたらてめーら姉弟がよく助けてくれたもんだ。

――ま、ほとんどオメーの姉ちゃんが暴れてただけだけだよ」

高屋は遠い目をして続ける。

「懐かしいもんだ。あの頃ア、お前らに完全に頼りきってた。

お前だけは何があっても友達だと思ってた――あの時裏切られるまえはよオ」

「タカチン、あれは…」

「言い訳なんか聞きたくねーな」

言葉を遮り、高屋はなおも続ける。

「てめーの半端な優しさで、俺がどれだけ傷ついたと思ってんだ! あんな真似すんならよオ、最初から俺なんてほっといてくれりゃよかったんだ!

あれから俺は…:チッ、まアいいさ。てめーのおかげで、俺も少しはたくましくなれた。もう誰もアテにしねー、自分自身が強くならなきゃならねーってな」

口の端を歪め、目を細める。

「今俺、族に入ってたんだ。知ってるか? ブルドッグ 舞流独愚? ってよ。

今じゃ、俺を虐めてた連中も怖がって近寄ってこねー。もう、て

めーの力なんて必要ねエ。

俺は変わったんだ、強くなったんだ」

そう言って去っていく高屋の背中を、新八は何も言えずに眺めていた。



「タカチンコ？だあれ、それ？」

新八の姉の妙が差し入れを持ってきた。

なんとなく和兔には予想がついているが、螢は口を開こうともせず
にレジの対角線上の店の端にモップを抱きしめて立っている。

「いや、タカチンコじゃなくてタカチンです…ホントに覚えてない
んですか？」

「昔のことは忘れたわ。私、前だけ見て生きていくことに決めたの」
しれっとした顔でそうのたまう。

「そんなことより、みなさんに差し入れ持ってきたんです。皆さん
も食べてください」

姉御オォ！！と神楽は嬉しさから妙に抱きついていいるし、銀時は差
し入れという単語にだけ反応したらしい。

「今回は新しい料理に挑戦してみたんです」。

「……ハイ、だし巻き玉子」

蓋を開けられた仕切りのない弁当箱のど真ん中には、何か黒い物体
が鎮座していた。

「私飲み物買ってくるヨ！」

「いいって！俺が行くから座ってろ！」

「俺が行きます任せてください！！！」

「ここはコンビニよ、飲み物ならそこに腐る程あるわ」

穏やかな顔で、妙は逃げようとした銀時、神楽、和兔を両手だけで
器用に制止した。

「新ちゃんと螢さんもこっちに来て食べなさい、女に恥をかかせるものじゃありません」

そう言う妙は弁当を前にして床に正座しているし、その弁当を挟んだ向かい側には泣いている三人が同じく正座で待機していた。

無論螢は無言で首を横に振っていたし、新八も動こうとはしなかった。

ただし、少しばかり違った理由で。

「……姉上。確か？舞流独愚？^{フルドッグ}っていえば、ここらで一番タチの悪い連中ですよ？ 窃盗だの、傷害だの、平気でやる連中だって」

「……新ちゃん、アナタそんなにタカチンポのことが……」

「姉上、タカチンです。段々悪化してますよ」

こんな時でもツツコミは冴えている。

「タカチンがあんなになったのは僕のせいなんです

彼が一番困っている時、僕だけは彼をつき離れたんだ」

あれはそう、まだ二人が寺子屋に通っていた頃——

「しっ…新ちゃん、どうしよう…ウンコもらしちゃった…」

講義中、新八の隣に座っていた彼は唐突にそう言った。

「ぐー、ぐー…」

関わりたくない一心で、新八は寝たフリを決め込んだ。

「新ちゃん、ホントは起きてんでしょ？ 新ちゃん！ 新ちゃんっ

てばっ！！」

「——青春なんて、砂上の楼閣ですよ。ほんの些細なことで、全て崩れおちてしまう。

アレからスグ、僕は借金のせいで寺子屋に通えなくなったけど、

タカチンがその後どんな生活を送ったか、容易に想像できますよ」
目を伏せる新八からは深刻な思いが伝わってくるが、いかんせん内容が内容なので、一同はどういう顔をしているのか分からない。

「…あの時、僕は一体どうすればよかったんですかね。」

どうすれば、タカチンを救えたんですかね」

「……いや、無理だろ」

「無理無理」

「それはどうしようもないだろ、絶対」

正座組は揃ってそう答えた。

螢はどう答えていいものかと悩み込んでいる。

「無理じゃないわ」

「！」

唐突に、妙は立ち上がって口を開いた。

「友達が泣いてる時は、一緒に泣いてあげればいい。」

友達が悩んでる時は、一緒に頭かかえて悩んであげればいい。

——友達が脱糞した時は、あなたも脱糞しなさい、新ちゃん」

それはないだろ……と一同揃ってそんな表情だが、新八はその言を真剣に聞いていた。

「どんな痛みも、友達なら分かち合うことができるのよ。」

そしてね、新ちゃん。もし友達が間違った道に進んでしまった時は——」

その時は、友情を壊してでも友達を止めなさい。

「それが、真の侍の友情よ」

「……」

ふと、新八は何かに突き動かされるように歩き出した。

「——すみません店長、用事がありますので早退させてもらいま

す」

それだけ言い残して、彼はそのまま店を出ていった。

「…オイオイいいのかよ。最近のガキヤなにするかわかったもんじやねーぜ？」

どーなつてもしらねーよ、俺ア」

妙はそれを聞いてか聞かずか、新八の去った後を見詰めていた。

第六訓 恥ずかしがらずに手を挙げて言え・1（後書き）

今回はここまでです。

次は月末くらいには投稿できるよう努力いたします。

それではまた次回。

第六訓 恥ずかしがらずに手を挙げて言え・2

とある河川敷に、一方的な打撃音が響いていた。

晒しと脚半に丈の長い白い着物を纏った姿の何十人という男達に囲まれ、高屋は砂利の上に這いつくばっていた。

「この役立たずがアア！！ 誰がお前、普通のムース盗ってこいて言ったよオメー！！」

また新たな打撃音。

「俺の髪はオメー、超ハードムースじゃねーとセットできねーって言っただろーが！ てめっ、どーすんだよ！ こんな恥ずかしい爆発頭じゃ街流すこともできねーよ！」

世紀末一直線な髪型のゴーグルの男はそう喚く。

「す、すみません……ちよつと邪魔が入っちまいまして……」

「てめーよオ、どうしてもウチ入りてーって言うから仕方なく入れてやったのによ、お使いもできねーんじゃ話にならんぜ。」

ちよつと気合入れる必要がありそうだな、気合をよオ」

男が顎で指し示すと、別の男が高谷の腹にロープを巻き付けた。

「なっ……なんスカコレ？ ちよつと！ 何するつもっ……」

ロープの先は、更に別の男が跨ったスクーターの荷台に繋がれていて……

スクーターが走り出すと、ロープで繋がれた高屋が砂煙をあげて石の上を引き摺られる。

引き摺られる様を見て、ゴーグルの男は野太い声で高笑いする。

「八兵衛、気合だ気合！ 気合があれば人間なんでもできる！」
今度は周りからも嘲笑が漏れる。

「そこの暴走族ども！！」

河川敷に、凜と澄んだ勇ましい声が響いた。

全員が土手に気を取られる。

そこには、ブラウスとデニムに何故か青い法被を合わせ、木刀を携えた少女が立っていた。

「何だテメーはア!？」

「?何だ?? ……何だと問うのね。なら応えるのが義理というものの——」

「あーはいはい、分かったから。な。話がややこしくなるから下がってようぜ螢」

口上の途中で邪魔が入ったのが気に入らないのか、螢は若干むくれている。

「じゃー志村くんあと頼んだー」

螢の横に並んだ和兎が声をあげる。
間を空けず、鈍い打撃音が響いた。

「今度は誰だ!？」

横転したスクーターと殴り飛ばされたように地面を転げた運転手の近くに立っているのは、少女と同じく青いはっぴを纏った眼鏡の少年。

「……俺が誰かだと? 俺を知らんとは、モグリかお前……」

おもむろに眼鏡の位置を直し、高々と声をあげる。

「俺は寺門通親衛隊隊長、志村新八だアアア!！」

「し、新ちゃん!」

ようやく体を起こした高谷は、膝をついたままで新八を見上げる。

「なんでこんな所にいんだよ! ここはお前なんかが来るところじゃねエ! 帰れ!」

そう叫ぶ声も、新八にはどこ吹く風。

真っ直ぐに白装束の集団を見据えて、また声をあげる。

「スイマセン! この中の頭は誰ですか!？」

「あん!?! 総長がテメーなんかに会うわけねーだろ! なんの用だテメー!？」

ゴーグルの男が声を荒げて応えた。

「高谷八兵衛を引き取りに来た。彼は今日をもって？舞流独愚？を抜け、お通ちゃんファンクラブに入ってもらおう。その許可が欲しい」しかしそんな提案、高屋本人が否定した。

「何勝手なこと言ってるんだ！？」　なんだ、お通ちゃんファンクラブって……」

その抗議を遮るように、新八が口を開く。

「タカチン……僕もタカチンと一緒にだよ。あのウンコ事件以来、自分の弱さが嫌で、ずっと強くなりたいって思ってた。

でもタカチン、強くなるための近道なんてない。外見だけ強く装ったって、そんなハリボテすぐにはがれ落ちてしまう。

徒党を組んだり、強い者の威を借りたり——

そんなものが、タカチンの求めてた強さなの？

そんな格好悪い奴に、タカチンはなりたかったの？」

高屋は自分の中で、何かが碎けるのを感じたような気がした。

「小僧、ワリーがウチは仲良しこよしでこんなことやってんじやねーんだ！」

「？辞めます？？ハイそーですか？なんて簡単にいく組織じゃねーんだよ……」

高圧的な徒党を前に、新八はなおも臆さない。

「だったら、力づくでもつれていきます」

「オイ、あんまりナメんじやねーぞクソガキが！！　たった一人で何ができるってんだ！？」

「一人じゃねーぞ」

後ろから掛けられた声に、白装束たちが振り返る。

「隊長オ、やっぱバイトなんてかったるくてやってられませんか」
「喧嘩ならあたいらも混ぜなアア！！」

「寺門通親衛隊特攻部隊？魔流血頭？見参！！」

つい半刻ほど前まで一緒だった五人が、青いはっぴを身に着けて、河川敷に並んでいた。

第六訓 恥ずかしがらずに手を挙げて言え・2（後書き）

どうも、朝宮です。

予告より一週間長引いてしまいました……

原作を文に直すのが苦手なようです…

次回も今月中には投稿したいと思いますので、また次回もご覧いただければ幸いです。

それでは。

第七訓 暴走はもうやめろ・1 (前書き)

どうも皆様、朝宮です。

大変長らくお待たせいたしました、ようやくの更新です。
ではどうぞ。

第七訓 暴走はもうやめろ・1

河川敷に謎の法被集団が現れたその頃、同じく河川敷にある廃材を積み上げた一角の開けた場所で、ミラーシェードを掛けた男が髪的位置を直していた。

「あれ？ コレ……生え際コレ、いつもよりちょっと不自然じゃねーか？」

どうやら自慢のリーゼントの生え際が気になるらしく、しつこくわしゃわしゃと弄くっている。

「コレお前、走ってるときにスポンとれたらどうなるだろ。今まで築いてきたものも全てパーだな」

ただ延々と漏らされる独白は、あるいは後ろに控えた彼の白い愛馬に語られているのかもしれない。

「あゝあ、若い頃からマゲ染めたりパーマあてたり、無茶やりすぎたな」

……やっぱ今日も接着剤でつくとくか……」

カパン、とそれを外した瞬間、部下の一人が大慌てで駆け込んできた。

「族長オオ！！」

「！！！！」

男も大慌てでカツラを頭に押し付け、なんとか部下の死角へ隠そうと背中を向けて蹲る。

「ババババッキヤローノックぐらいしろオオ！！」

「す、すいません！　——え？　ノックってどこですか？」

「心のノックだバカヤロー！！」

あまりの出来事に無茶なことを言い出した。

「んな事より大変なんです族長！　化物みてーに強エ連中が乗り込んできて——」

法被の集団は、傘やら木刀やら竹刀やら、果ては拳で白装束の？舞^{ブルドック}流独愚？達を薙ぎ倒していく。

そんな中、一人の怒声が響き渡った。

「てめーら何してんだアア！！」

全員が一斉にそちらに振り向いた。

「なんでも暴力で解決すんなって言っただろーがアア！ 少年漫画かお前ら！！」

言ってることは真つ当なのだが、いかんせん暴走族の族長には言われたくない台詞である。

「ていうかなんだこりゃあ！？ 何があった！？」

「族長の頭も何があったんですか？」

族長の後方に控えた部下が言うとおりに、その頭ではカツラが斜め方向に装着されているという不思議なことになっていた。

「江戸で最強・最速を誇るチーム？舞流独愚？をたった6人で……てめーら何者だ？」

族長はあっさり部下の声を黙殺した。

「あん？ 俺達はあの、アレだコルア。特攻部隊……えー……なんだったコルア」

「特攻部隊……ぽ、？保女羅尼暗？じゃなかったかしらコルア」

銀時は完全に忘れてるし、妙も犬の種類であることくらいしか覚えていないらしい。

「マルチーズ！？魔流血頭？だゴルア！ なめんなよ！？」

こういうのには多少慣れている和兎がチーム名を名乗る。が

「いや、マルチーズなめんなよって言われてもな……」

ほぼ全員が同意見だった。

「だいたい、？魔流血頭？なんてチームきいたことねえぜ！ 一体

何の用だ!？」

「えーと……俺ら何しに来たんだコルア! わかんねーよ!」

「こっちがききたいわ!!」

「タカチンを引き取りに来た! もう僕の友達に万引きなんてさせない!」

新八が声を張り上げる。

「タカチンコ? ウチのチームにそんな奴いたか?」

「ええ、こないだ入った高屋のことです」

「それで、その高屋は?」

「アレです」

部下の指差す方向には――

神楽にボコボコにされている高屋がいた。

「おいイイイ!! 何してだアアア!!」

「え? これがタカチンコ? 間違えちゃったぜ、ざけんじゃなヨ」

「間違えちゃったぜじゃないっつーの! 一体何しに来たんだよ!」

「だってみんな頭にフランスパンつけてて見分けつかないアルヨ」
主に顔を重点的に殴られた高屋は、既に意識を失っていた。

「メガネ……お前、高屋のツレか? なるほど、友達更正させようと乗り込んだわけか」

メガネのくせに良い根性してるじゃねーか。気に入ったぜ、そんな小物つれていききたきゃつれていけ」

「しかし総長!」

ただし、と付け加えて。

「その前にやらしてもらうことがある。俺達のチームではカタギに戻る前にある儀式をやることになってる。

だがそのザマじゃ高屋は無理……」

――かわりにてめーらにやらしてもらおうか。

と、そう言ったのだった。

第七訓 暴走はもうやめろ・1（後書き）

試験だ何だと忙しくとうとう三ヶ月も間が……

今年は今までより更新が不定期になると思いますが、どうか見放さないでください。

それではまた次回お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8847g/>

巡りモノ

2011年10月5日23時43分発行